原東遺跡2

（はら　ひがし）

―第1次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第953集

2007

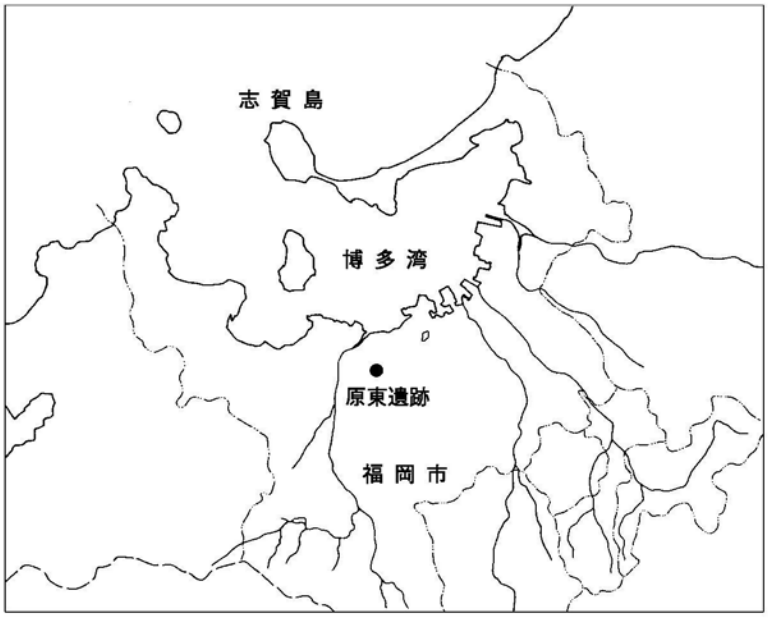
福岡市教育委員会

原東遺跡2

（はら　ひがし）

—第1次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第953集



調査番号 7953
遺跡略号 HRH-1

2007

福岡市教育委員会

序

二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、アジアに開かれた都市としてさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、早良区飯倉四丁目267番地の共同住宅の建設に先立って実施した原東遺跡第１次調査の発掘調査報告書です。

発掘調査では、弥生時代中期の甕棺墓群が発見されました。この地は、早良平野開口部の有田遺跡群と飯倉遺跡群とに挟まれた微高地上にあり、青銅器を保有する拠点的集落を取り巻く衛星的集落の墓地群として位置づけられ、弥生時代の社会構造を知る貴重な資料です。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、地域史の研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成19年３月30日

福岡市教育委員会
教育長　植 木 とみ子

れ い げ ん

1．本書は、福岡市教育委員会が福岡市早良区飯倉４丁目267番地（旧西区飯倉４丁目267）における共同住宅の建設に先立って、1979(昭和54)年の４月初旬～５月末日までに緊急発掘調査した原東遺跡第１次調査の発掘調査報告書である。
2．本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3．遺構は、甕棺墓をST、土壙をSK、溝遺構をSDと記号化して呼称し、その後に遺構毎に通番して01からナンバーを付した。
4．本書に掲載した遺構の実測には沢皇臣氏を初め学生諸氏があたった。また、遺物の実測は調査時に学生諸氏が一部を作成したほかは小林義彦が作成した。
5．本書に掲載した遺構と遺物の製図は、小林と今村ひろ子が作成した。
6．本書に掲載した写真は遺構を沢皇臣が、遺物は小林が撮影した。
7．本書の執筆・編集は小林が行った。
8．本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序
Ⅰ．はじめに ……1
　１．発掘調査にいたるまで ……1
　２．発掘調査の組織 ……1
　３．立地と歴史的環境 ……3
Ⅱ．調査の記録 ……7
　１．発掘調査の概要 ……7
　２．甕棺墓 ……7
　３．土　壙 ……21
　４．溝遺構 ……27
　５．包含層の遺物 ……29
Ⅲ．おわりに……30

挿図目次

Fig.１　周辺遺跡分布図(1／30,000) ……2
Fig.２　原東遺跡周辺地形図（明治33年） ……4
Fig.３　原東遺跡第１次調査区現況図（1／1,000） ……5
Fig.４　原東遺跡遺構配置図（1／200） ……6
Fig.５　１号甕棺墓実測図（1／30) ……7
Fig.６　１号甕棺実測図（1／12) ……8
Fig.７　２・３号甕棺墓実測図（1／30) ……9
Fig.８　２・３号甕棺実測図（1／12） ……10
Fig.９　４・５号甕棺墓実測図（1／30） ……11
Fig.10　４・５号甕棺実測図（1／12） ……12
Fig.11　６～11号甕棺墓実測図（1／30） ……13
Fig.12　６～８号甕棺実測図（1／12） ……14
Fig.13　９～11号甕棺実測図（1／12） ……15
Fig.14　12～16号甕棺墓実測図（1／30) ……16
Fig.15　12～16号甕棺実測図（1／12) ……17
Fig.16　17・18号甕棺墓実測図（1／30) ……18
Fig.17　17・18号甕棺実測図（1／12) ……19
Fig.18　１号土壙実測図（1／40） ……21
Fig.19　１号土壙出土遺物実測図１（1／4) ……22
Fig.20　１号土壙出土遺物実測図２（1／4) ……23
Fig.21　２号土壙実測図（1／60） ……23
Fig.22　２号土壙出土遺物実測図（1／4) ……24
Fig.23　３号土壙実測図（1／40） ……25
Fig.24　３号土壙出土遺物実測図１（1／4) ……26
Fig.25　３号土壙出土遺物実測図２（1／6) ……27
Fig.26　４・５号土壙実測図（1／40） ……27

Fig.27　４号土壙出土遺物実測図（1／4）……28
Fig.28　１～４号溝断面図（1／30）……28
Fig.29　包含層出土遺物実測図（1／4）……28
Fig.30　２号土壙・１号溝・包含層出土石器実測図（1／1・1／3）……29

表目次

Tab. 1　甕棺墓一覧表 ……30

図版目次

PL. 1　（1）調査区南側甕棺墓群(東より)　（2）１号甕棺墓・３号土壙(北より)
（3）１号甕棺墓(北より)
PL. 2　（1）２～６号甕棺墓(東より)　（2）２・３号甕棺墓(南より)
（3）２号甕棺墓(南より)
PL. 3　（1）３号甕棺墓(南より)　（2）４・５号甕棺墓(北より)
（3）４号甕棺墓(北より)
PL. 4　（1）調査区中央部甕棺墓群(東より)　（2）５号甕棺墓(北より)
（3）６号甕棺墓(東より)
PL. 5　（1）７・８号甕棺墓(東より)　（2）７号甕棺墓(東より)
（3）８号甕棺墓(西より)
PL. 6　（1）調査区北側全景(南より)　（2）９号甕棺墓(西より)
（3）10号甕棺墓(北より)
PL. 7　（1）調査区北側甕棺墓群(南より)　（2）11号甕棺墓(東より)
（3）12号甕棺墓(北より)
PL. 8　（1）13号甕棺墓(北より)　（2）14号甕棺墓(東より)
（3）15号甕棺墓(西より)
PL. 9　（1）16号甕棺墓(西より)　（2）17号甕棺墓(西より)
（3）18号甕棺墓(東より)
PL.10　（1）１号土壙(東より)　（2）１号土壙遺物出土状況(南より)
（3）１号土壙(東より)
PL.11　（1）２号土壙(北より)　（2）２号土壙遺物出土状況(北より)
（3）２号土壙遺物出土状況(西より)
PL.12　（1）３号土壙(北より)　（2）３号土壙遺物出土状況(北より)
（3）３号土壙遺物出土状況(北より)
PL.13　（1）３号土壙(北より)　（2）４号土壙(東より)
（3）５号土壙(南より)
PL.14　出土甕棺１（縮尺不同）
PL.15　出土甕棺２（縮尺不同）
PL.16　出土甕棺３（縮尺不同）
PL.17　出土遺物１（縮尺不同）
PL.18　出土遺物２（縮尺不同）

Ⅰ．は　じ　め　に

１．発掘調査にいたるまで

福岡市の西部に拡がる早良平野の東縁には油山から派生した丘陵が長くのび、条里の区割りが残る沖積地には、稲穂が風になびく豊かな水田地帯が拡がっていた。しかし、急速に進む福岡市の人口増加は郊外の市街地化を推し進め、四半世紀前の稲田には家々が建ち並び、更には高層化へと進んでいる。殊に、二十一世紀には市営地下鉄七隈線や都市高速道路、外環状道路の開通に伴ってその傾向は一段と進み、昔日の面影はまったく失われた趣さえ窺われる。

本調査が実施された70年代後半の飯倉から原、有田にかけては、丘陵上に飯倉や有田、小田部の集落があり、沖積地に拡がる稲田の中の微高地上には原や次郎丸などの集落が点在していた。幹線道路に近く交通の利便な平野口の原や飯倉地区は、早くから市街地化して家々が建ち並んでいたが、人口の急速な増加に伴ってその傾向は沖積地の水田地帯にも及んできた。

1978(昭和53)年10月19日、飯倉４丁目267番において住宅の建設を計画された堀美津子氏より、埋蔵文化財の有無の照会があった。この地は、原東遺跡として周知された埋蔵文化財包蔵地内にあり、弥生時代を中心とする遺構が拡がっていることが予想された。同年11月７日にその詳細を明らかにするために試掘調査を実施したところ、耕作土直下から弥生時代中期の甕棺墓が検出された。この結果を受けて、現状での保存策を協議したが、基礎部分が遺構面に達することから発掘調査によって記録保存を図ることになった。発掘調査は、1979年４月よりはじめ堀美津子氏をはじめとする関係者諸氏のご理解とご協力を得て５月末日に無事終了した。

２．発掘調査の組織

調査委託	堀　美津子
調査主体	福岡市教育委員会
発掘調査	文化部文化課
	文化部長　志鶴幸弘
	文化課長　井上剛紀
調査担当	沢　皇臣
発掘作業	石橋千恵　伊藤良子　篠原修二　白土義実　其旗真二　難波新吾　速水信也ほか
資料整理	文化財部埋蔵文化財第２課
	文化財部長　山崎純男
	埋蔵文化財第２課長　力武卓治
	埋蔵文化財課第２課第１係長　池崎譲二
庶　　務	文化財管理課長　榎本芳治　鈴木由喜
整理担当	埋蔵文化財第１課　小林義彦
整理作業	石橋陽子　今村ひろ子　大瀬良清子　土斐崎孝子　永野麻子　馬場イツ子　藤井羊子 三栗野明美　矢川みどり

発掘調査は、地権者の堀美津子氏をはじめ関係者諸氏のご理解とご協力をいただき、多くの成果を残して無事に終了した。しかし、資料整理の半ばで調査を担当された沢皇臣氏は、病のために光りを奪われ、中断したまま今に至った。四半世紀を経た今日、調査成果を明らかにするために補助事業として発掘調査報告書を作成することとなったが、担当者不在のまま保管場所を移動したことによって

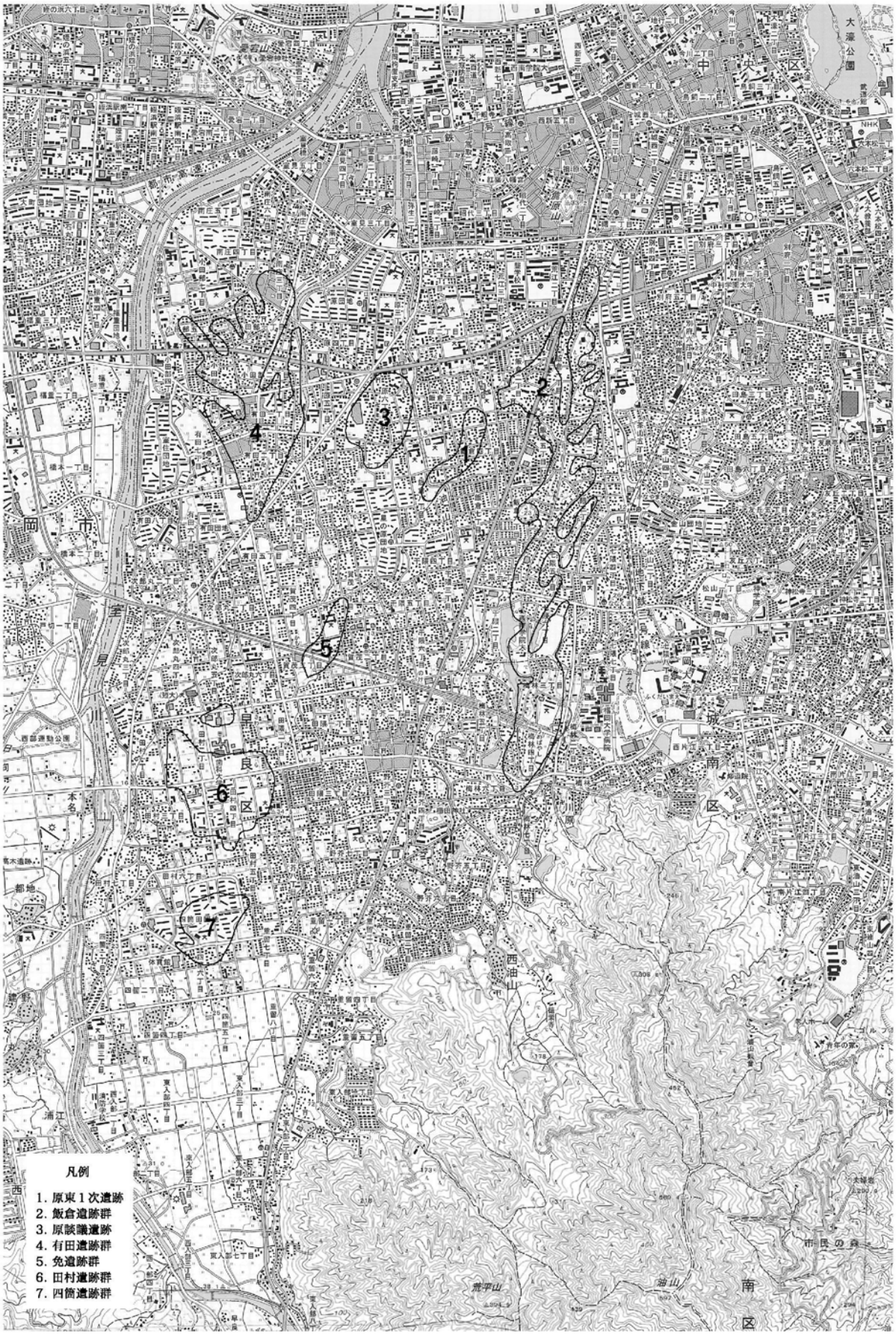


Fig.1　周辺遺跡分布図（1／30,000）

資料の一部が散逸した可能性がある。殊に、調査時に観察された遺構などの細かい文字記録が全くないため表層的な報告になってしまい、書中の挿図や記載には不満足な点が多くある。発掘調査を担当された沢皇臣氏の学識と労苦を十分に活かせなかったことをお詫びするとともに、ご指導、ご助言をいただいた山口譲治、池崎譲二、常松幹雄氏に感謝を申し上げます。

３．立地と歴史的環境

早良平野は福岡市の西部に拡がる狭小な平野で、北は博多湾にむかって開口し、東は油山山塊によって福岡平野と、また西は飯盛山から長垂山とつづく山塊によって糸島平野と遮られている。この山塊によって三方を囲まれた平野は、南にそびえる背振山地から流れ出した室見川によって造り出された沖積地と海岸砂丘からなり、平野内には第三紀丘陵と洪積台地が点在している。

この早良平野では、1967(昭和42)年の有田遺跡の発掘調査以来、開発に伴う緊急調査の増加とともに数多の遺跡が調査されて旧石器時代から中世までの様相が次第に明らかになっている。飯倉丘陵を中心として室見川右岸を概観すると、旧石器時代の文化層は明らかではないが、尖頭器やナイフ型石器が出土したカルメル修道院遺跡や飯倉Ｅ遺跡が飯倉丘陵上に立地している。

縄文時代には、曽畑式土器が出土した五ヶ村池遺跡や飯倉Ｅ・Ｇ遺跡、クエゾノ遺跡などがあり、重留古墳群の調査でも前期や後期の土器が出土している。また、室見川右岸の微高地上に立地する四箇遺跡や田村遺跡では早期や晩期の遺構があり、次第に早良平野の沖積地全域へと拡大していく。

弥生時代になると早良王墓として著名な吉武遺跡群を頂点として、遺跡は平野の全域に急速に増加拡大していく。微高地上の田村遺跡や重留遺跡では前期初頭の墓地や集落跡が、油山西麓の岩隈遺跡や浦田遺跡では前期末から中期末の甕棺墓や土壙墓などが調査されている。飯倉丘陵上には、前期末の甕棺墓に細型銅剣や碧玉製管玉を、中期後葉の甕棺墓に素環頭鉄刀を副葬した飯倉唐木（飯倉Ｃ）遺跡、中期後半の甕棺墓に錫釧を副葬したカルメル修道院遺跡、後期の木棺墓に小型?製鏡を副葬した干隈（飯倉Ｇ）遺跡が立地している。また、西方の独立丘陵上に拡がる有田遺跡では銅戈や前漢鏡が、南方平野奥の東入部遺跡では細型銅剣や銅釧、素環頭刀子などの鉄製武器が前期末から中期後半の甕棺墓や土壙墓に副葬されている。しかしながら、室見川左岸にある吉武遺跡群の土壙墓や甕棺墓群とは隔世の感があり、平野内における両者間の政治的な従属関係を如実に物語っている。

古墳時代には、丘陵上や平野内の各所に集落跡が営まれる。飯倉Ｆ遺跡では前期の竪穴住居跡が、飯倉Ｃ・Ｇ遺跡や野芥遺跡などでは後期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土壙などが確認されている。また、微高地上の東入部遺跡や田村遺跡、四箇遺跡などでは前期の竪穴住居跡やその生産活動に伴う水田の水利施設などが確認されている。一方、首長墓としての古墳は、前期には京の隈古墳（前方後方墳）と拝塚古墳（前方後円墳）がある。京の隈古墳の内部主体は木棺直葬の粘土槨であり、拝塚古墳の墳丘上には円筒埴輪のほかに家形や盾、鞆、武人などの形象埴輪が巡らされていた。後期には神松寺古墳や梅林古墳があり、室見川右岸の平野東部域を支配する首長墓が断続的に造墓されている。また、丘陵上や山麓には干隈古墳群などの小円墳からなる幾つもの群集墳が造営される。

古代から中世は野芥荘などと云われ、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、鍛冶炉、土壙墓などが飯倉Ｃ・Ｇ・Ｆ遺跡などで調査されているが、遺跡の中心域は重留や田村遺跡などの平野部に移っていく。

原東遺跡は、この早良平野東縁の飯倉丘陵北端と室見川右岸の独立丘陵上のある有田遺跡に挟まれた微高地上に立地する東西が350m、南北が400mほどの狭小な遺跡である。これまでの発掘調査例は３地点に過ぎず、遺跡の詳細な拡がり方や時期的な展開は明らかではない。しかし、20ヶ所余りが調査されているすぐ西の原遺跡では、縄文時代から中・近世までの遺構が拡がっており、同じような微高地上に立地していることを勘案すると、原東遺跡でも同様の傾向を示すものと推考される。

Fig.2　原東遺跡周辺地形図（明治33年）

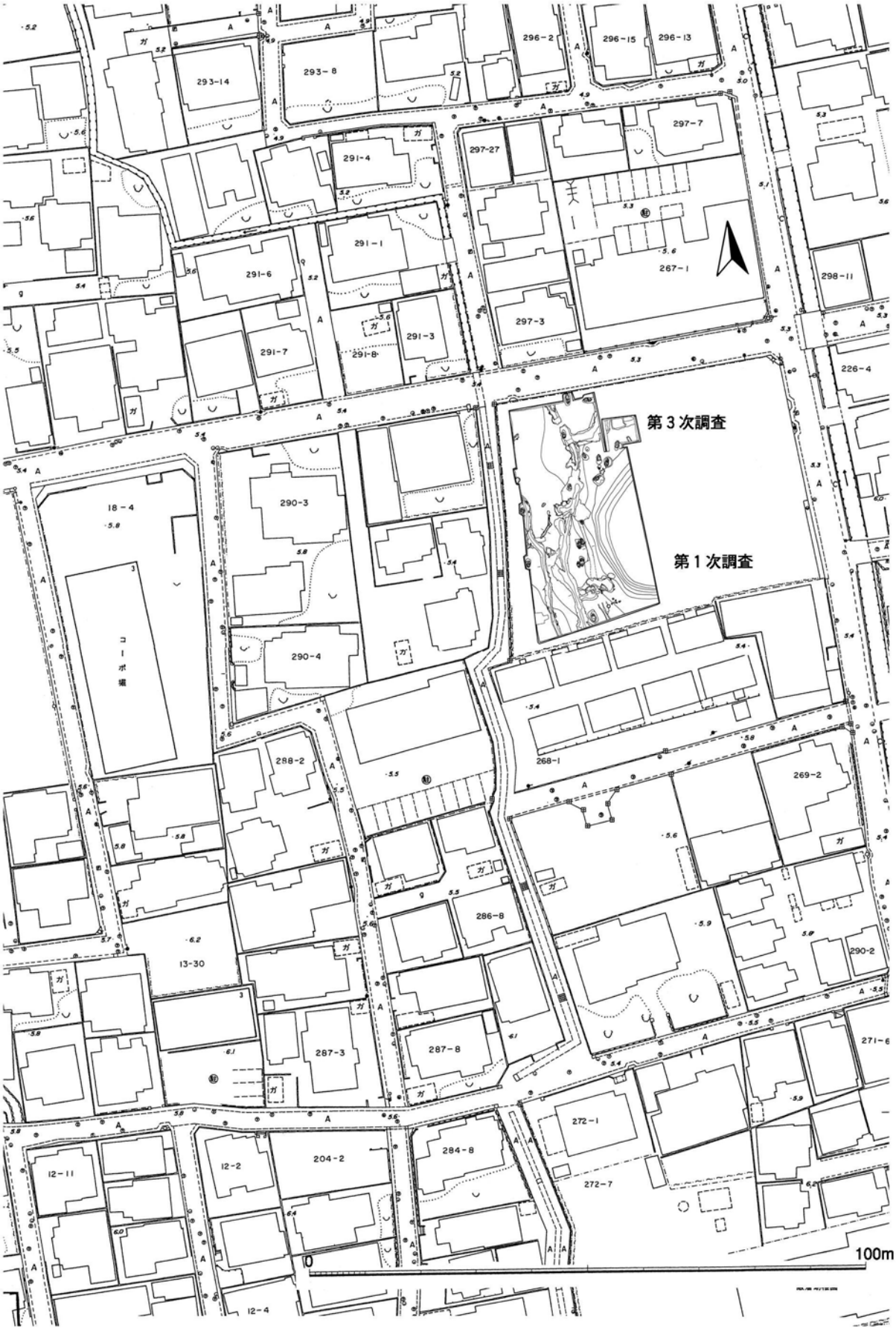


Fig.3　原東遺跡第1次調査区現況図（1／1,000）

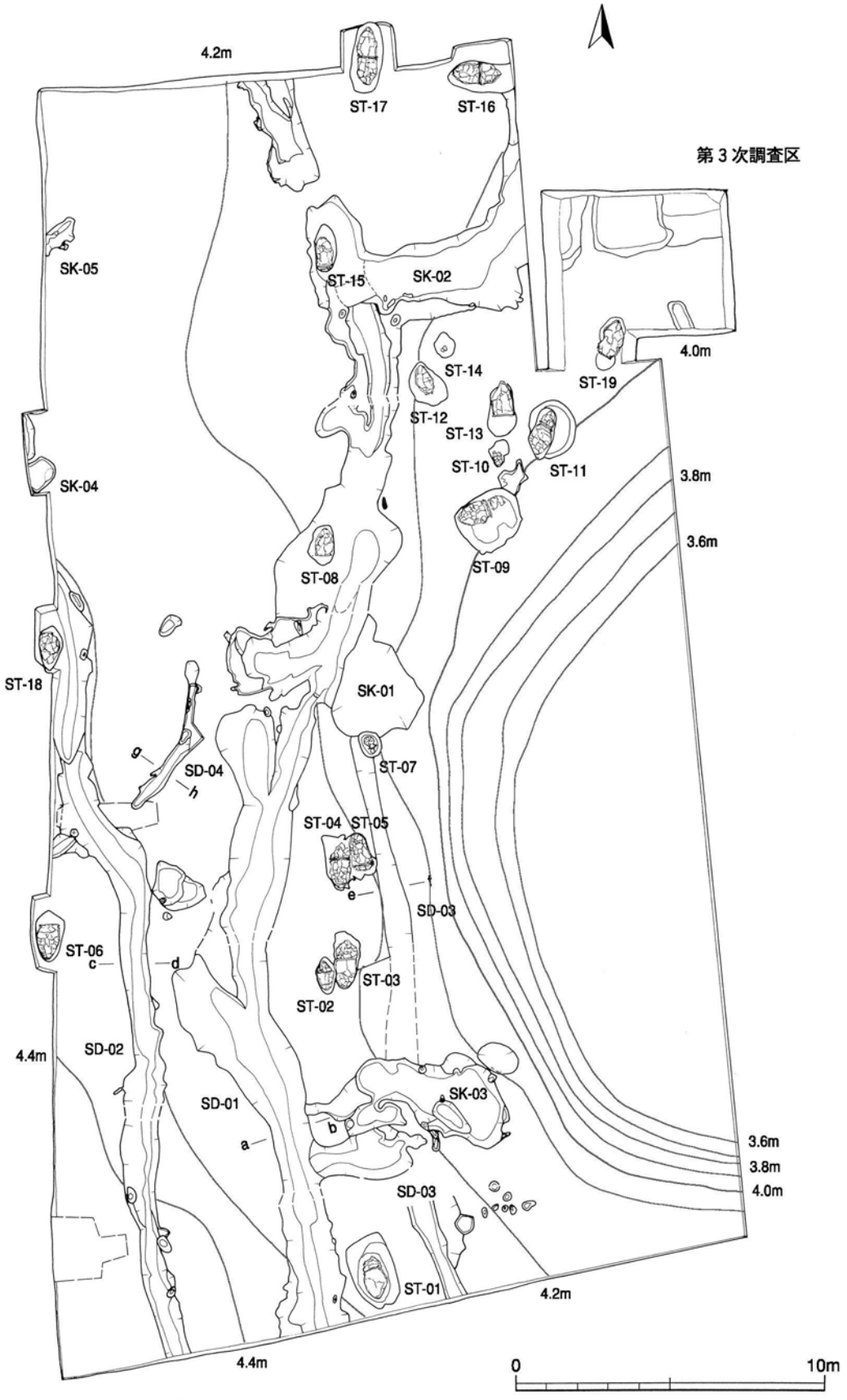


Fig.4　原東遺跡遺構配置図（1／200）

II. 調 査 の 記 録

1．発掘調査の概要

早良平野の東縁には、八ツ手状に小支丘を広げながら細長くのびる低丘陵が油山から派生している。飯倉丘陵と呼称される低丘陵で、その丘陵上には旧石器時代から中世までさまざまな時代の人々の息吹が残され、飯倉遺跡として総称されている。この飯倉遺跡北縁は、福岡平野から早良平野に至る開口部にあたり、ここから室見川右岸に屹立する独立丘陵上の有田遺跡との間に原東遺跡と原遺跡が微高地上に東西に並んで立地している。

原東遺跡は、室見川下流右岸の微高地上にあり、古くには新村、唐木、柏塚、原、鴨添、免、建屋敷などの村々が微高地上に営まれ、周りには稲田が拡がっていた。70年代には未だその面影があり、条里の区割りも色濃く残っていた。1967(昭和42)年の有田遺跡の調査にはじまり、四箇遺跡などの調査を経て埋蔵文化財の周知化が進んでいた。原東遺跡第１次調査区は、飯倉遺跡の北縁から小谷を隔てた微高地の北部に位置し、分布調査で弥生式土器片などが採集されていた。

発掘調査は、表土層の除去作業から開始した。その結果、調査区の東には浅い谷が湾入しており、その谷に沿うようにして南北方向に溝がのびていた。この溝の上には弥生時代中期の甕棺墓18基が溝と並ぶようにして確認された。しかし、これらの甕棺墓は削平による消失が著しく完存するものは1基もない。水田化による沖積地の開発が早い時期から行われた結果と思われる。発掘調査では、18基の甕棺墓と４基の土壙、４条の溝のほか柱穴等を検出して終了した。それから25年、再開発に伴って調査区の北東縁で、第３次調査が実施され甕棺墓１基を検出している。この２度の調査から原東遺跡北縁の微高地上には甕棺墓群が拡がっているものと考えられるが、調査例が３地点と少なく、遺跡の拡がりや全体像は明らかでない。

2．甕棺墓（ST）

甕棺墓は、18基を検出したが、平成17(2005)年３月に調査された北東隅の１基を含めると19基が確認された。分布的には、東へ開口する谷の縁辺に沿って南北に帯状に拡がっている。これらの甕棺墓は、調査区の中央部を南北に貫流する１号溝（SD－01）を境として、東側に拡がるⅠ群と西側に拡がるⅡ群の２グループに大別することができる。このうちⅠ群は、１号溝を中心にして列状に並んで拡がる傾向を示しているが、これが直ちに列埋葬とは言い難い。また、このⅠ群は１号溝と接する２号土壙（溝）を境として15号～17号甕棺墓（Ⅰ－１群）と９号～14号甕棺墓（Ⅰ－２群）の小

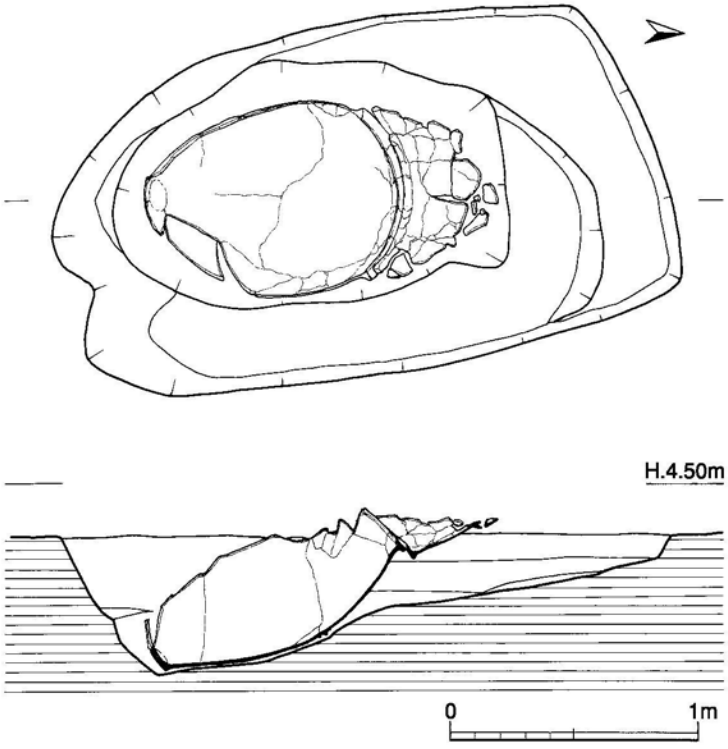


Fig.5　1号甕棺墓実測図（1／30）

群にグルーピングされる。さらに、南でも２～５号・７号甕棺墓（Ⅰ－３群）と１号甕棺墓（Ⅰ－４群）に細分される。ただし、西側に拡がる一群の分布次第によって群構成の在り方が変化する可能性も含んでいる。一方、19基の甕棺墓のうち明らかな小児墓は７号甕棺墓１基で、成人墓に削平状況から推してその多くは水田の開削によって消失したものと考えられ、本来は成人墓に並ぶ小児墓があったものと推察される。

１号甕棺墓　ST－01(Fig.5･6　PL.1･14)

１号甕棺墓は、調査区南端の東西を１号溝と３号溝に北を３号土壙によって画された小区画内に立地する接口式の成人墓で、北へ８ｍの距離には３号甕棺墓が位置している。甕棺は、上下甕ともに大型の甕を用い、主軸方位をＮ－3°－Ｗにとって埋置されている。墓壙は、長辺が240cm、短辺が140cmの隅丸長方形の竪穴で、北側にフラット面を造った後、さらに浅い緩斜面を造りながら南へ向かって楕円形をした浅い斜坑を掘っている。下甕は、この斜坑の南端に底部を接して約36°の傾斜をもって埋置されている。この埋置角のために凹レンズ状の墓壙底と甕の接口部は、壙底より25cmほど上面に位置している。接口部に粘土目貼りは施していない。

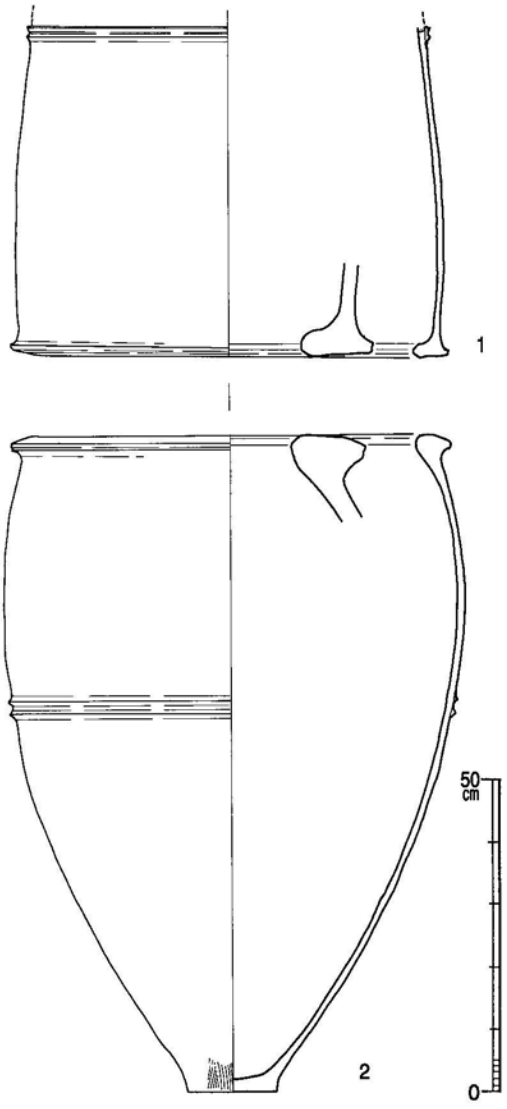


Fig.6　1号甕棺実測図（1／12）

上甕(1)は、口径70cm、現存高52.6cmの大型の甕で、胴部凸帯径は64cm。Ｔ字状の口縁部はわずかに外傾する。肥厚した内唇は丸く収め、外唇は小さく摘み出して端部をフラットに整えている。胴部はストレートに窄まり、中位にM字状の凸帯が巡る。調整は、口縁部がヨコナデ、内面は押圧ナデ。胎土は良質で多くの石英砂とシャモット様の赤褐色粒、雲母を含む。色調は淡赤褐色～淡黄赤褐色。摩滅の著しい胴部外面には大きな黒斑が残る。

下甕(2)は、口径70～72cm、底径14cm、器高が71.2cmの大型の甕。肥厚したＬ字状の口縁部は緩やかに外傾し、外唇の張り出しは小さい。胴部は、上半がやや膨らんだ倒卵形で中位にシャープな２条の三角凸帯が巡る。口縁部はヨコナデ、内面は押圧ナデ、外面はナデて仕上げ下端にはハケ目が残る。摩滅が著しい外面にはスス様の黒色顔料の塗布痕がある。胎土は良質で、多くの石英砂や雲母のほかにシャモット様の赤褐色粒を少量含む。

２号甕棺墓　ST－02(Fig.7･8　PL.2･14)

２号甕棺墓は、調査区の南部にある接口式の中人墓で、上甕に中型の鉢、下甕にはやや大型の甕を用いている。３号土壙を隔てた南へ８ｍの距離には１号甕棺墓が位置している。また、東に接して３号甕棺墓が主軸を並べて埋置されており、３号甕棺墓の埋葬後に埋置されている。墓壙は、北側に竪穴を掘り、その南側を更に１段掘り下げた２段掘りの構造をなしている。壙底は浅い凹レンズ状をなし、Ｌ字状の口縁部を接する合わせ口部は、口縁部を安定させるかのように浅く溝状に掘り込まれている。

甕棺は、この楕円形をした２段掘りの墓壙の底面に甕を接するようにしてほぼ水平に安定して埋置している。主軸方位は、N－2°－E。

上甕(3)は、口径46cm、現存高が33.4cmで復原高は39cmになろう。L字状の口縁部は、内唇を小さく摘み出す。胴部は半倒卵形を呈し、口縁部下にシャープな三角凸帯を１条巡らしている。口縁部はヨコナデ、内面は押圧ナデ、外面はナデ調整。胎土はやや粗く、多くの石英砂のほかに少量の雲母微粒とシャモット様の赤褐色粒を含む。内面は淡橙～淡黄色、外面は淡明黄橙色。

下甕(4)は、口径60cm、現存高が59cmの大型甕。T字状の口縁部は小さく外傾する。厚い内唇は強く張り出し、外唇はスマートに摘み出して端部を平坦に整えている。胴部は上半がわずかに膨らむ倒卵形で、中位には１条のM字凸帯が巡るが下段は細く小さい。調整は口縁部と凸帯部がヨコナデ、内面は押圧ナデ、外面はナデ。凸帯部にスス様の顔料痕があり、器面全体に塗布されていた可能性もある。胎土はやや粗く多量の石英砂とシャモット様の赤褐色粒を少量含む。色調は内面が淡黄色、外面は明赤橙色。

３号甕棺墓　ST－03(Fig.7･8　PL.2･3･14)

３号甕棺墓は、調査区の南部にある接口式の成人墓で、墓壙の西縁は主軸を並べた２号甕棺墓によって削平されている。南方８ｍの距離には１号甕棺墓が３号土壙を隔てて位置している。また、主軸の北方延長線上には４号甕棺墓が隣接して位置している。甕棺は、上甕が中型の甕、下甕は大型の甕である。長辺186cm、短辺が97cmの楕円形のプランを呈する墓壙は、初めに深く竪穴を掘り、その南側に緩やかな斜坑を20cmほど掘り込んで凹レンズ状の壙底を造っている。そのため一見、浅い２段掘り状の断面形をしている。甕棺は、この壙底の南端に下甕の口縁部を接してほぼ水平に埋置し、上甕は下甕の内唇に呑み込まれるように覆っているため約４°に傾きをもっている。主軸方位は、N－1.5°－Eにとる。

上甕(5)は、口径68～70cm、底径は約10cmで器高は57cmに復原できる大型の鉢である。大きく外傾する口縁部は、内唇が肥厚し外唇はスマートに整えている。胴部は玉葱状の半球形で、口縁部下にシャープな２条の三角凸帯が巡る。口縁部～凸帯部がヨコナデのほかはナデ調整。胎土は砂粒と少量の赤褐色粒を含み、焼成は堅緻。色調は淡黄橙色。

下甕(6)は、口径72cm、現存高が62.6cmの大型の甕。肉厚のT字状の口縁部は小さく外傾し、内外唇の張り出しは弱い。胴部は上半が小さく膨らんだ砲弾形をなし、口縁部下に１条、中位に２条の三角凸帯が巡る。調整は口縁部と凸帯部がヨコナデ、内面は押圧ナデ。胎土には多くの砂粒を含み、焼成は堅緻。色調は内面が淡赤橙～淡廃黒色、外面は淡黄橙～淡黄灰色。

４号甕棺墓　ST－04(Fig.9･10　PL.3･14)

４号甕棺墓は、調査区の東側を列状に並ぶⅠ群のほぼ中央部にある接口式の成人墓で、

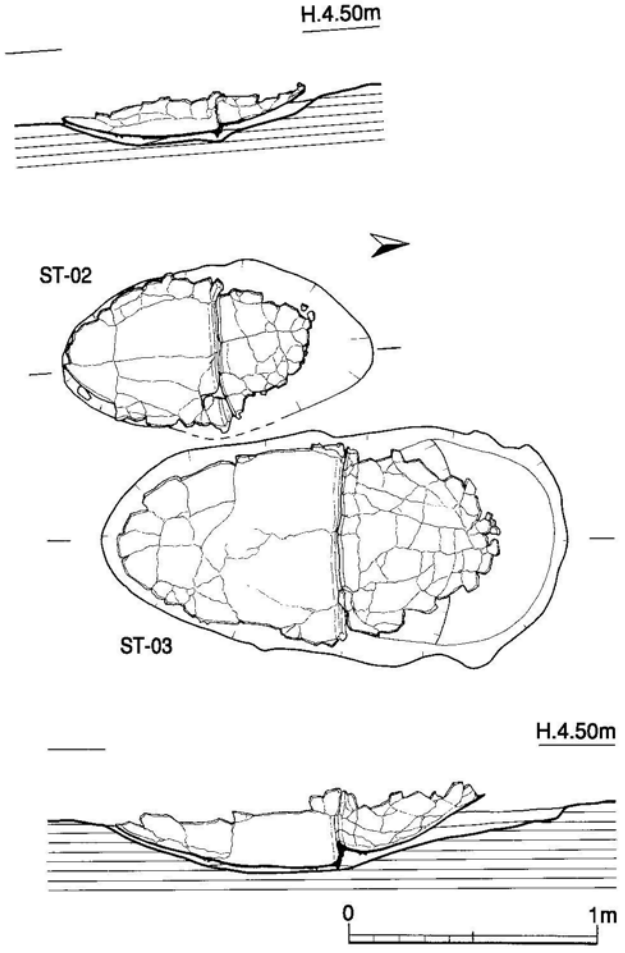


Fig.7　2･3号甕棺墓実測図（1／30）

上甕には大型の鉢、下甕には大型の甕を用いている。東には５号甕棺墓が上下甕を逆にして接しており、５号甕棺墓を切って埋置している。また、甕棺主軸の南延長線上には３号甕棺墓が位置している。墓壙は長辺が181cm、短辺が60～100cmの上甕部が間口の広い楕円形プランを呈し、壙底は緩やかな凹レンズ状をなしている。甕棺は、下甕をほぼ水平に埋置してその上に２～３°傾けた鉢を覆い被せて上甕としている。主軸方位はN－１°－W。

上甕(7)は、口径64cm、底径11.2cm、器高が48cmの大型の鉢。緩やかに外傾する逆Ｌ字状の口縁部は、内唇が大きく肥厚し、外唇は小さく摘み出す。胴部は玉葱状の半球形で、口縁部下にはシャープな三角凸帯が１条巡る。調整は口唇～凸帯部がヨコナデ、内面は押圧ナデ、外面はナデ。胎土には多くの小砂粒と雲母を含む。内面は淡黄灰色で、大きな黒斑がある。外面は淡黄橙～赤橙色。

下甕(8)は、口径が66cmで、器高は約97cmに復原される。Ｔ字状の口縁部はわずかに外傾し、内唇は強く張り出す。口縁部下には１条のM字凸帯が、砲弾形の胴部中位には２条のシャープな三角凸帯が巡る。調整は口縁部と凸帯部がヨコナデ、内面は押圧ナデで外面は摩滅が著しい。胎土は多量の石英砂とシャモット様の赤褐色粒を含み、焼成は堅緻。内面は淡黄灰色、外面は明赤橙～淡黄橙色。

５号甕棺墓　ST－05(Fig.9･10　PL.3･4･14)

５号甕棺墓は、調査区の東側に並ぶ列状のＩ群のほぼ中央部に位置する成人墓で、西には４号甕棺墓が上下甕を逆にして並列しており、４号甕棺墓より古い。甕棺は、上甕に大型の鉢、下甕に大型の甕の口縁部を接した接口式で合口部には粘土等による目貼りは施していない。墓壙は、上甕側が間口の広い楕円形プランの竪穴で、下甕側が小さくオーバーハングした箱形の断面形をなしている。壙底はほぼ平坦で、甕棺は20°の傾斜で下甕を埋置している。主軸方位は、N－13°－W。

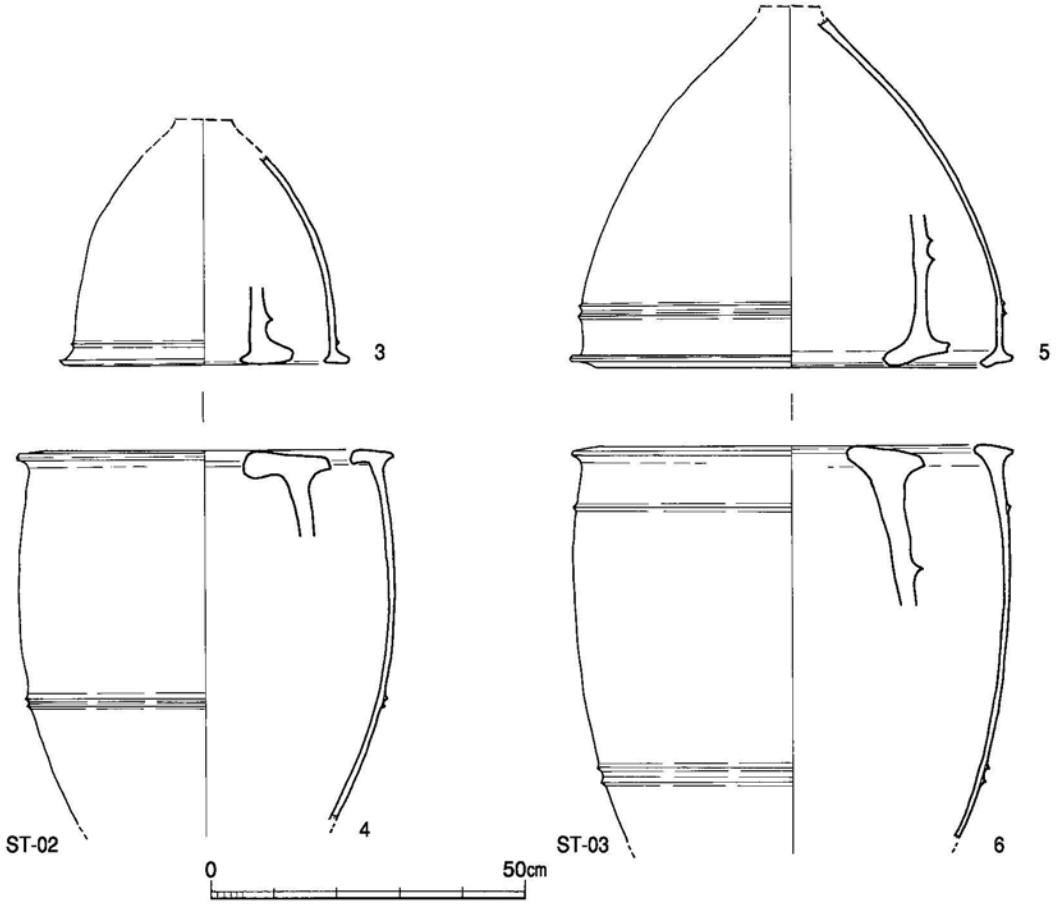


Fig.8　2･3号甕棺実測図（1／12）

上甕(9)は、口径71cm、底径13.2cm、器高が43cmの大型の鉢。外傾するＴ字状の口縁部下には２条の連接する三角凸帯が巡る。また、その凸帯と口縁部との境には緩やかな凸帯状の摘み出しがあり、一見して3条の三角凸帯が巡るような感がある。胴部はストレートに窄まり、底部は上げ底状になる。調整は口縁部がヨコナデのほかはナデ。内底面は押圧ナデ。胎土は多くの細～祖砂粒を含むほか雲母微細とシャモット様の赤褐色粒を含む。内面は黄橙～灰茶色、外面は淡赤橙色。

下甕(10)は、土圧による歪みが著しく口径は62～67cm、底径は13cm、器高は96.3cmの大型の甕。口縁部はＴ字状をなし、内唇は小さく内湾して丸く収めた端部を摘み下げている。小さく膨らんだ胴部は砲弾形をなし、中位には１条のM字凸帯が巡る。底部はやや肉薄で上げ底状をなす。調整は口縁部と凸帯部がヨコナデ、内面はナデ、内底面は指頭押圧ナデ。口縁部下と凸帯部にはスス様の黒色顔料痕があり、全面に塗布されていた可能性もある。胎土は良質で、微細砂～石英粗砂粒を多く含む。色調は内面が黄褐色、外面は明赤橙色。

６号甕棺墓　ST－06(Fig.11･12　PL.4･14)

６号甕棺墓は、調査区の中央部を南北に延びる１号溝の西側に分布するII群の南端に位置する単口式の成人墓である。甕棺墓の東へ８ｍの距離には１・２号溝を挟んで２号甕棺墓が、また北方８ｍの距離には主軸線を揃えるようにして18号甕棺墓が並んでいる。甕棺は、楕円形プランの墓壙に10°の傾きで、浅い凹レンズ状の壙底に接するようにして埋置されている。口縁部下の壙底には、3～5cm幅の浅い溝状の窪みがあり、木板で覆った木蓋の甕棺墓と考えられる。主軸方位はN－2.5°－W。甕棺(11)は、口径が72cmの大型の甕で、底径は10～11cm、器高は103cmほどに復原されよう。口縁部は肥厚したＴ字状をなす。胴部は上半がストレートに窄まる砲弾形をなし、口縁部下に1条、胴部下半に2条のシャープな三角凸帯が巡る。胎土には多くの細～祖砂粒と若干量の雲母を含み、焼成は堅緻。色調は内面が淡黄橙色、外面は淡明赤橙色。

７号甕棺墓　ST－07
(Fig.11･12　PL.5･15)

７号甕棺墓は、調査区の中央部にある小児墓で、１号土壙の南壁を切って掘り込まれている。甕棺墓の南３ｍには５号甕棺墓が、また北へ５ｍの距離には８号甕棺墓がある。墓壙は、長辺が85cm、短辺が75cmの隅丸プランを呈し、壙底は南壁にむかって傾斜している。甕棺は、墓壙の東壁に沿って壷の口縁部を６°ほど下方に傾け、壙底からは15～20cmほど浮かして埋置している。また、この壷に接して壷の底部が直立状態であり、上甕とした可能性も考えられる。主軸方位はN45°－Wにとる。

甕棺(12)は、口径23.9cmの底部を欠く壷で、底径は10cm、器高は36cmに復原されよう。口縁部は外唇を水平に延ばした鋤先状をなす。ラッパ状に外反する頸部はストレートに窄まり、大きく屈曲して偏球形

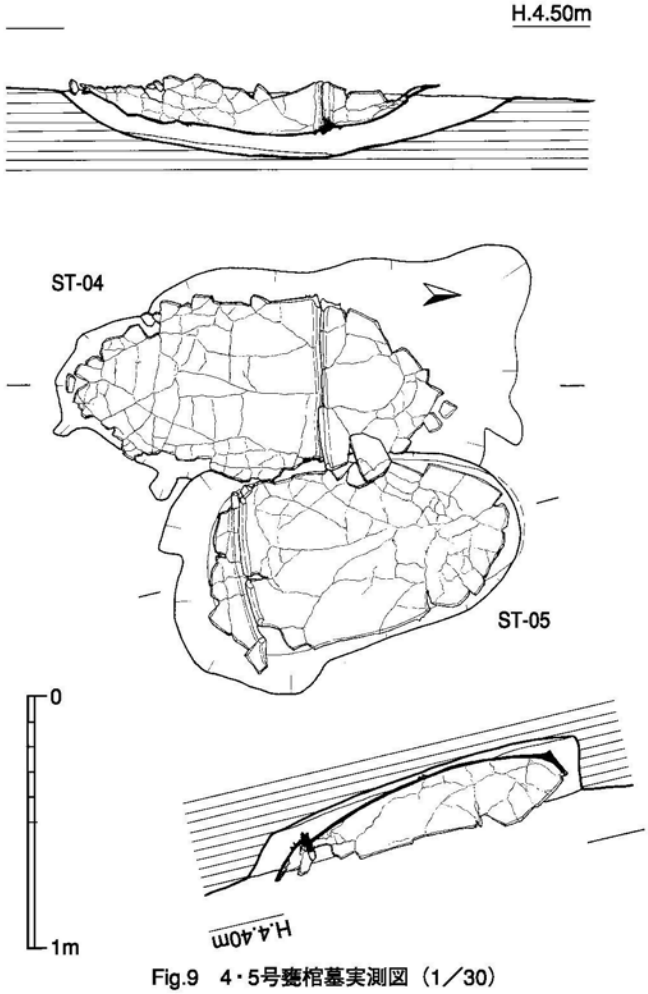


Fig.9　4･5号甕棺墓実測図（1／30）

の胴部へと続く。胴部の最大径位とその上に各々１条の三角凸帯が巡る。口縁部と凸帯部がヨコナデ、内面は押圧ナデ、外面は丁寧なナデ。胎土は精良で、焼成は良好。淡明橙色。

８号甕棺墓　ST－08(Fig.11・12　PL.5・15)

８号甕棺墓は、調査区の東側に拡がるⅠ群のほぼ中央部にある単口式の成人墓で、１号溝の埋没後に埋置されている。北方８ｍには15号甕棺墓が、南へ９ｍの距離には４号甕棺墓が主軸線を揃えるようにして南北に並んでいる。また４ｍほど東には９号～13号甕棺墓が小さな一群を作って分布している。甕棺は、やや不整な楕円形プランの墓壙に口縁部が若干低い－２°の傾斜をもって胴部上位を凹レンズ状の壙底に接するようにして埋置されている。口縁部から２～３cm外側の壙底は鋭い屈曲点があり、木蓋の固定痕の可能性も考えられる。主軸方位は、N－1.5°－Wにとる。

甕棺(13)は、68cm、底径12cm、器高が90.6cmの大型の甕である。T字状の口縁部は水平で、内唇は厚く、外唇は下から摘み出すようにして薄く整えている。砲弾形の胴部は、上半がストレートに立ち上がり口縁部下で小さく内傾する。胴部のやや下位には１条のM字凸帯が巡り、底部は上げ底になる。凸帯や胴部中位にはスス様の黒色顔料が遺存しており、器表全体に塗布していた可能性も考えられる。胎土には多くの微細～石英祖砂粒と少量の赤褐色粒を含む。色調は淡明赤橙色。

９号甕棺墓　ST－09(Fig.11・13　PL.6・15)

９号甕棺墓は、調査区の東側に拡がるⅠ群の中の北東部に位置する接口式の成人墓で、西へ４ｍの距離には１号溝を挟んで８号甕棺墓がある。甕棺墓は、西を１号溝、北を２号土壙（溝）によって画

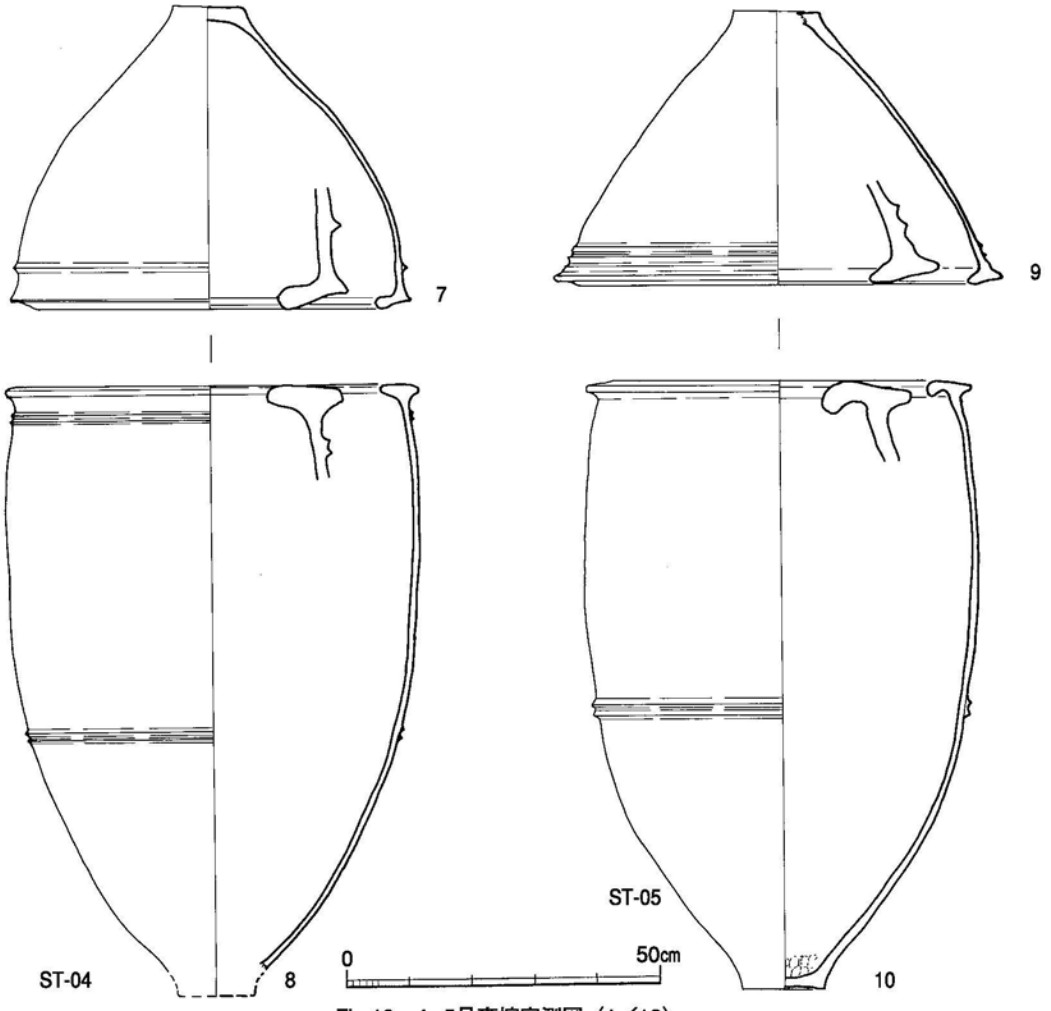


Fig.10　4・5号甕棺実測図（1／12）

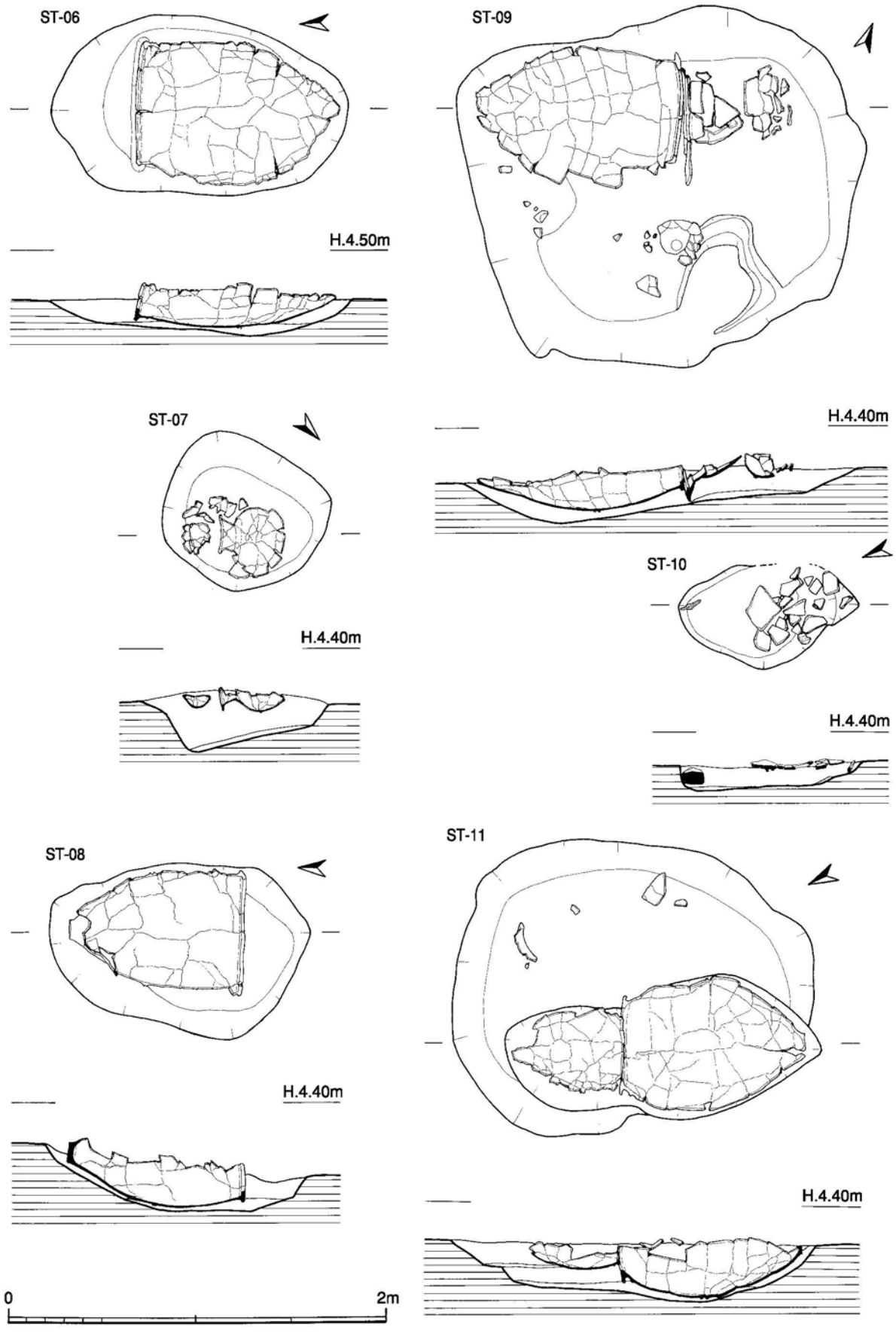


Fig.11　6～11号甕棺墓実測図（1／30）

され、この中に10～14号甕棺墓とまとまって小さな一群（Ⅰ－２群）をなしている。上甕は大型の壷、下甕は大型の甕である。墓壙は、長辺が210cm、短辺が190cmのやや不整形な隅丸方形プランの竪穴をなし、壙底は上甕部がフラットで下甕部は甕の胴部に合わせたように浅い凹レンズ状をなしている。甕棺は、この墓壙の北壁に沿って5～7°ほどの傾斜をもたせて埋置している。主軸方位はN－69°－Wにとる。また、南壁に沿った壙底には口縁部を打ち欠いた壷が伏せた状態であり、供献された可能性も考えられる。甕の接合部に粘土目貼りはない。

上甕(14)は、口径68～70cm、現存高55.6cmの大型壷である。口縁部は小さく外傾する鋤先状口縁で内唇は屈曲して水平に摘み出す。頸部は直口して立ち上がり、口縁部にむかって緩やかに外反する。胴部は偏球形で、最大径部と頸部の屈曲部およびその中間に刻目を施したM字凸帯を１条巡らしている。胎土は精良で、微細～小砂粒のほか雲母微細と赤褐色粒を含む。内面は黄橙色、外面は淡黄色。

下甕(15)は、71cm、底径12cm、器高が100.8cmの大型の甕。T字状の口縁部は内唇を厚くして一見L字状に整えている。胴部は上半がストレートに立ち上がる砲弾形で、シャープな２条のコ字凸帯が巡る中位を境に緩やかに窄まる。厚い底部は上げ底気味。凸帯部にスス様の黒色顔料が僅かに残るが摩滅が著しい。胎土は良質で微細～中砂粒を含む。内面は淡灰黒色、外面は淡灰～淡黄橙色。

10号甕棺墓　ST－10(Fig.11・13　PL.6)

10号甕棺墓は、調査区の東側に拡がるⅠ群の北東部、西と北を１号溝と２号土壙によって画された小さな一群中（Ⅰ－２群）にある成人墓で、棺底部を残してその大半が水田開削時の削平によって消失している。四周は９号甕棺墓や11～13号甕棺墓によって囲まれ、北に接する13号甕棺墓とは主軸線を揃えて縦列している。墓壙は不整な楕円形プランをなそう。壙底の南小口壁側には小さなフラット面があり、１段掘りの構造をなしている。

甕棺(16)は、砲弾形をなす大型の甕で、胴部中位を残して大半が消失している。胴部中位のやや下方に太くてシャープな２条の三角凸帯が巡る。摩滅が著しいが、凸帯部はヨコナデ、内面は押圧ナデ。胎土は細～中砂粒を多く含み、焼成は堅緻。色調は内面が淡黄橙色、外面は暗橙褐色。

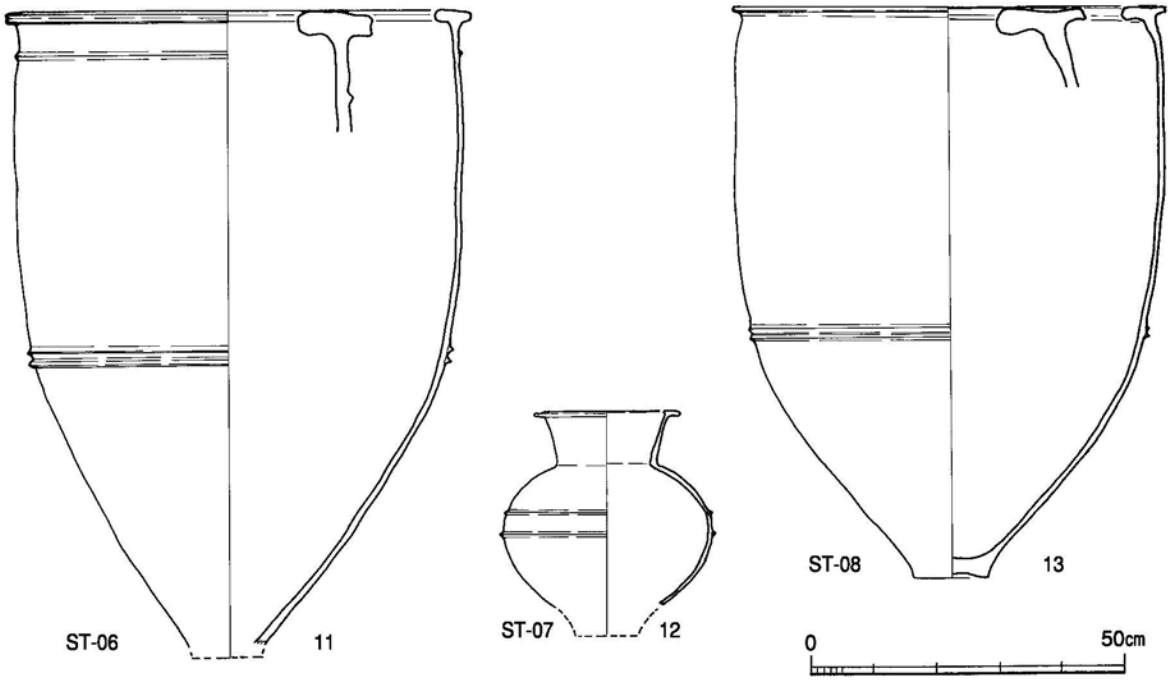


Fig.12　6～8号甕棺実測図（1／12）

11号甕棺墓　ST－11(Fig.11・13　PL.7・15)

11号甕棺墓は、調査区の東側に拡がるⅠ群の北東部にある呑口式の成人墓である。甕棺墓は、西と北を1号溝と2号土壙によって画された小群（Ⅰ－2群）中にあり、すぐ西には10号甕棺墓と11号甕棺墓が南北方向に縦列に並んでいる。上甕は中型、下甕は大型の甕である。墓壙は、長辺が195cm、短辺が155cmの隅丸方形プランで、その西壁際に長さ165cm、幅55～75cmの甕の形状に合わせたスマートな楕円形の2次墓壙を掘り込んだ2段掘りの構造をなしている。甕棺は、この2次墓壙に下甕を壙底に密着してほぼ水平に埋置しており、そのために下甕内に口縁部を挿入した上甕は壙底から10cmほど浮いている。主軸方位はN－25°－Eにとる。

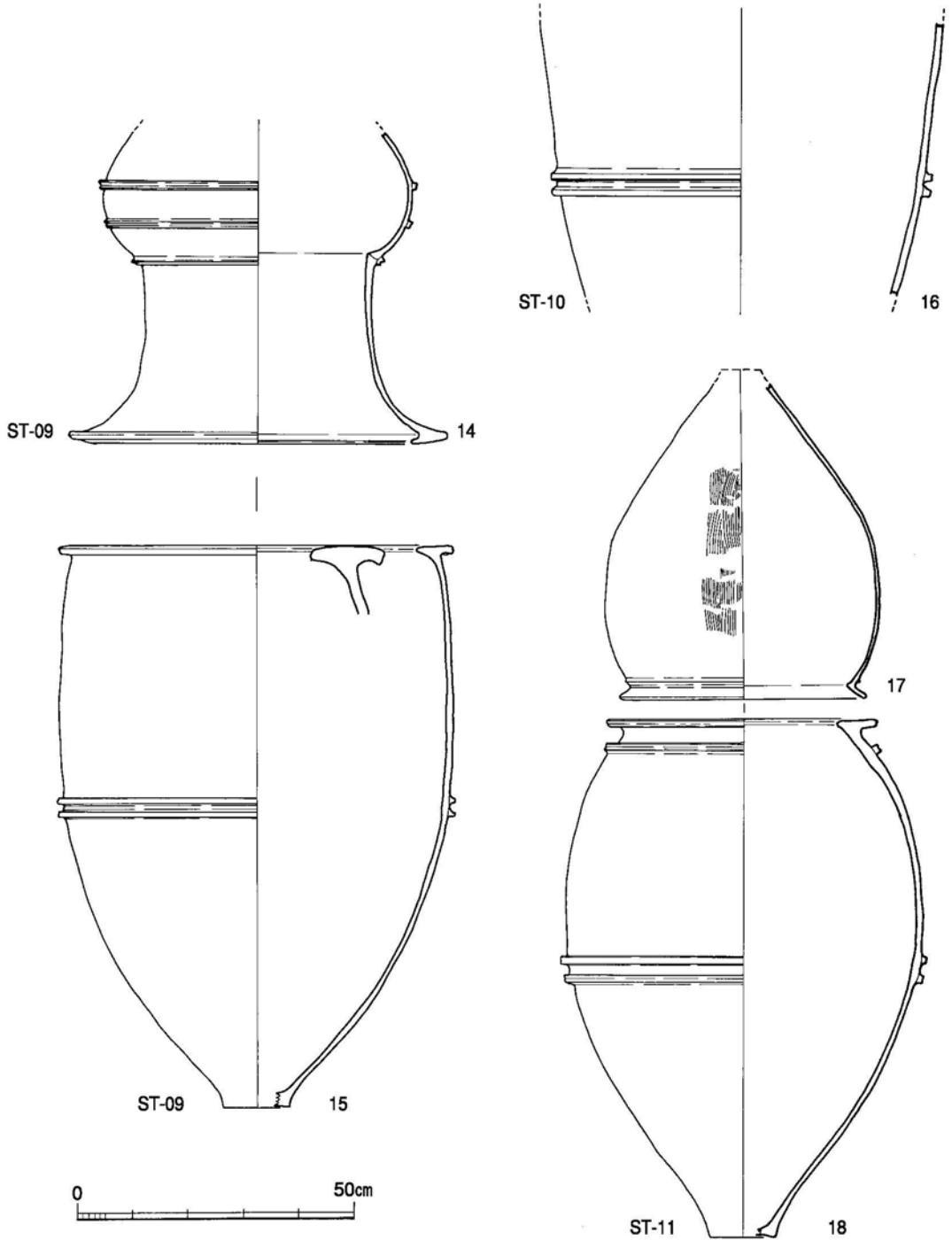


Fig.13　9～11号甕棺実測図（1／12）

上甕(17)は、口径が45cmの中型の甕で、底径が7cm、器高は60cmのなろう。口縁部は大きく外反する「く」字状で、倒卵形をなす胴部との境には１条の三角凸帯が巡る。口縁部はヨコナデ、内面は押圧ナデ、外面は粗いハケ目調整で下半にはススが残る。胎土は精良であるが、細～石英祖砂粒と雲母微細を含む。焼成は堅緻。内面は明黄色、外面は淡灰黄～灰茶色。

下甕(18)は、口径48.6cm、底径12cm、器高が92.8cmの大型の甕である。口縁部は厚いＬ字状をなす。倒卵形の胴部は上半が大きく膨らんで内湾し、口縁部下に１条、胴部中位に２条の厚くてシャープなコ字凸帯が巡る。器壁は上半が肉厚で、下半はやや薄い。口縁部と凸帯部はヨコナデ、内面は押圧ナデ、外面はナデ。胎土は良質で細～中砂粒を多く含み、色調は淡黄橙色。

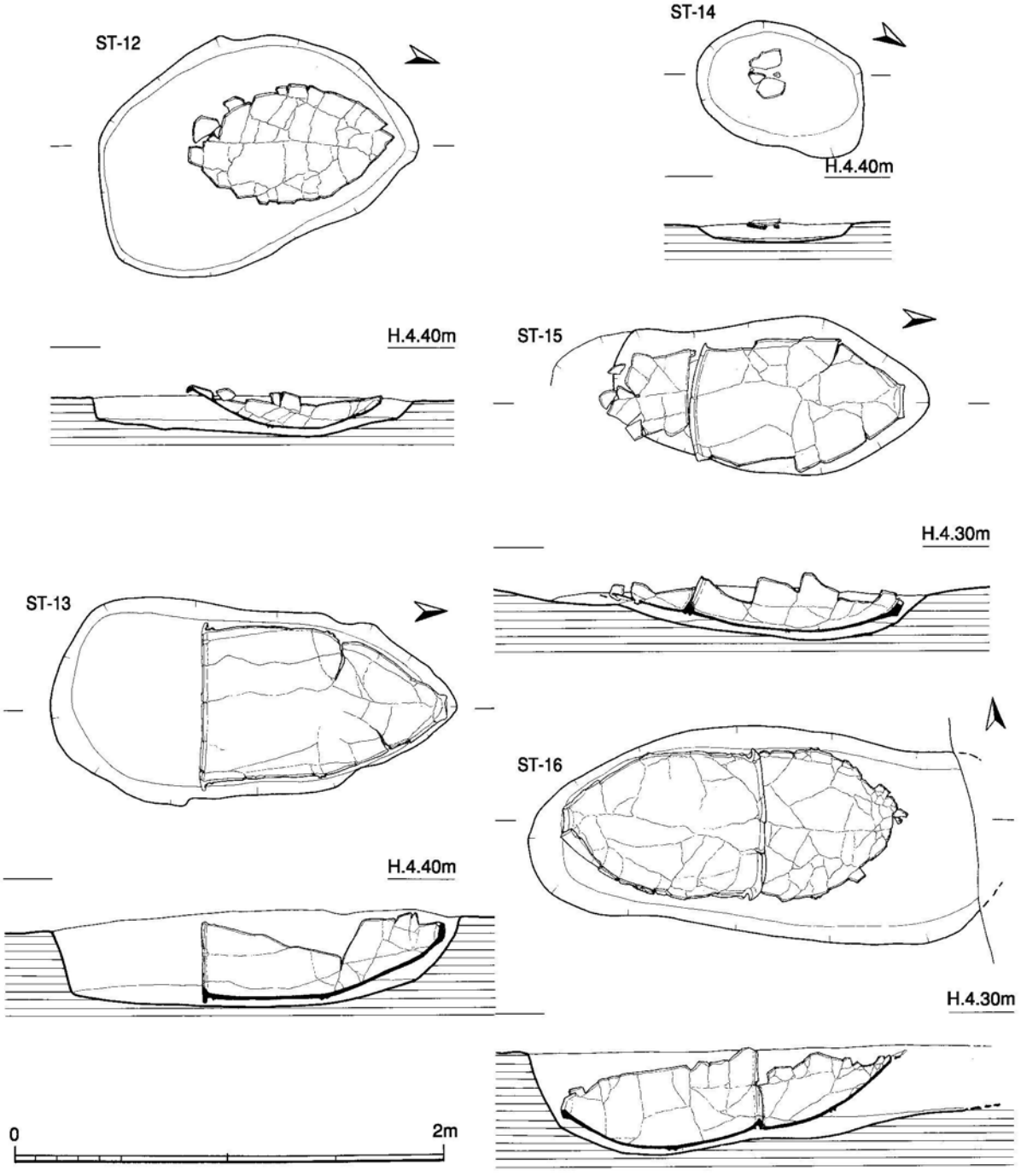


Fig.14　12～16号甕棺墓実測図（1／30）

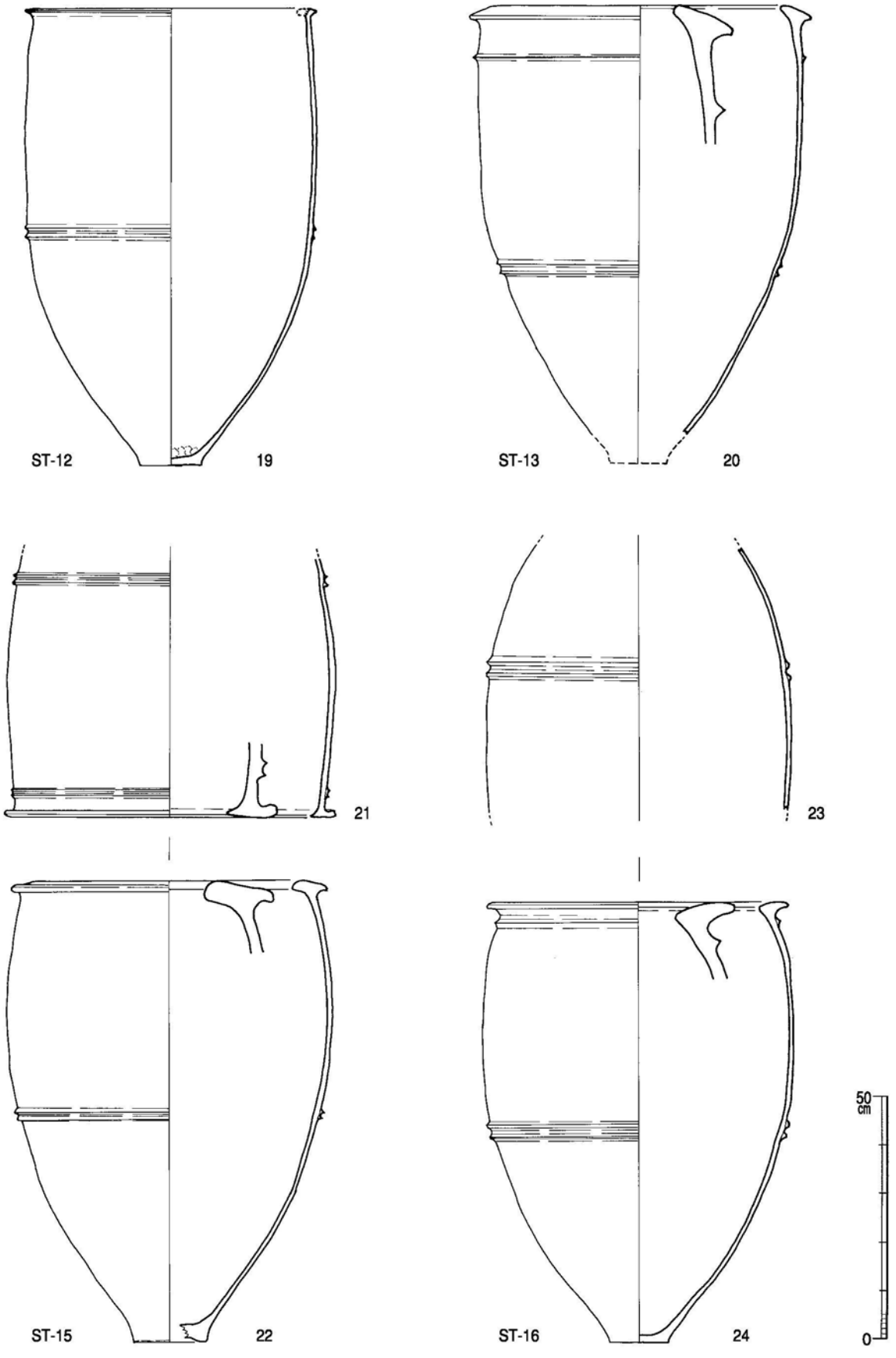


Fig.15　12～16号甕棺実測図（1／12）

12号甕棺墓　ST－12(Fig.14・15　PL.7)

12号甕棺墓は、調査区の東側に拡がるⅠ群の中で、１号溝と２号土壙によって画された小群（Ⅰ－２群）中の北西隅に位置する単口式の成人墓である。すぐ北には14号甕棺墓、東には13号甕棺墓が隣接している。墓壙は長辺が148cm、短辺が110cmの不整な楕円形プランを呈し、壙底は5～10cmほど浅く凹レンズ状に窪んでいる。甕棺は、この墓壙の北寄りに甕底を8°傾けて挿入している。甕棺と墓壙の南側にはやや広めのスペースがあり、遺存状況から上甕で覆蓋した可能性も考えられる。主軸方位は、N－11°－Wにとる。

甕棺(19)は、口径60cm、底径12cm、器高が93.6cmの大型の甕。水平に整えたＴ字状の口縁部は内唇が厚く張り出し、外唇は嘴状に摘み出している。砲弾形をなす胴部は、上半はストレートに立ち上がり、中位に２条の三角凸帯が巡る。摩滅が著しいが、口縁部と凸帯部はヨコナデ、内底面は指頭押圧ナデ。胎土はやや粗く、多くの微細～石英祖砂粒とシャモット様の赤褐色粒を少量含む。色調は内面がややくすんだ淡黄灰色、外面は淡明橙～淡黄灰色。

13号甕棺墓　ST－13(Fig.14・15　PL.8・15)

13号甕棺墓は、調査区の東側に拡がるⅠ群の北東部、西と北を１号溝と２号土壙によって画された中に群集する小さな一群（Ⅰ－２群）中にある単口式の成人墓である。甕棺墓のすぐ東には11号甕棺墓が、西には12号甕棺墓があり、南には10号甕棺墓が主軸線を南北に揃えて縦列している。墓壙は、長辺が188cm、短辺が97cmの底部側が尖った不整な楕円形プランをなしている。甕棺は、この墓壙の壙底に棺底を接してほぼ水平に埋置され、主軸方位は、N－0°－Eにとる。

甕棺(20)は、口径70cmの大型の甕で、器高は94cmほどになろう。Ｔ字状の口縁部は大きく外傾し、内外唇の張り出しは弱い。砲弾形をなす胴部上半はストレートに立ち上がるが、口縁部下は肉厚で僅かに内湾する。口縁部下に１条、胴部のやや下位に２条のシャープな三角凸帯が巡る。胴部外面の随所にスス様の黒色顔料が遺存しており、器表全体に塗布されていたものと推測される。胎土には多くの微細～小砂粒と少量の祖砂粒、雲母を含む。内面は上半が淡灰色、下半が淡黒色。外面は淡黄灰色。

14号甕棺墓　ST－14(Fig.14　PL.8)

14号甕棺墓は、調査区の東側に拡がるⅠ群の中で、１号溝と２号土壙によって画された小群（Ⅰ－２群）中の北西端に位置する成人墓で、すぐ南西には12号甕棺墓がある。甕棺は、水田開削時の削平で大半が消失しおり全容は明らかではない。

甕棺は、大型の甕であるが、胴部片を僅

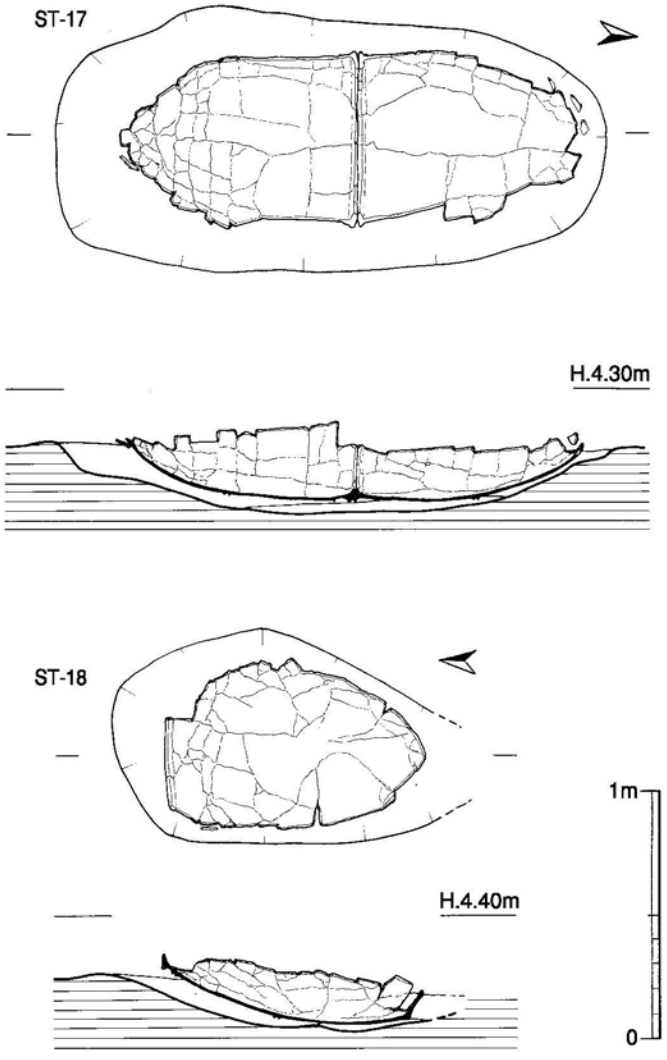


Fig.16　17・18号甕棺墓実測図（1／30）

かに残すのみで、図示できなかった。

15号甕棺墓　ST－15(Fig.14･15　PL.8･15)

15号甕棺墓は、調査区の東側に拡がるⅠ群のうちの北に位置する接口式の成人墓で、１号溝と２号土壙が合する溝の埋土上に立地している。北へ４ｍの距離には17号甕棺墓が主軸を揃えるようにして位置している。上甕は中型、下甕は大型の甕である。墓壙は、長辺が175cm、短辺が73cmのスマートな楕円形プランを呈し、その南壁側に浅い斜壙を掘り込んだ２段掘りの構造をなしている。甕棺は、この斜壙に14°の傾斜で下甕を挿入し、その上にやや小振りの甕を接して覆蓋している。甕の合口部に粘土等による目貼りは施していない。主軸方位は、N－1°－Eにとる。

上甕(21)は、口径が68～70cmの大型の甕で、胴部下半を欠く。水平に整えたL字状の口縁部は、内唇を嘴状に小さく摘み出す。砲弾形をなす胴部の上半はストレートに立ち上がる。口縁部下に１条のM字凸帯が、胴部中位には２条の凸帯が巡るが上方がコ字、下方が三角凸帯である。摩滅が著しく

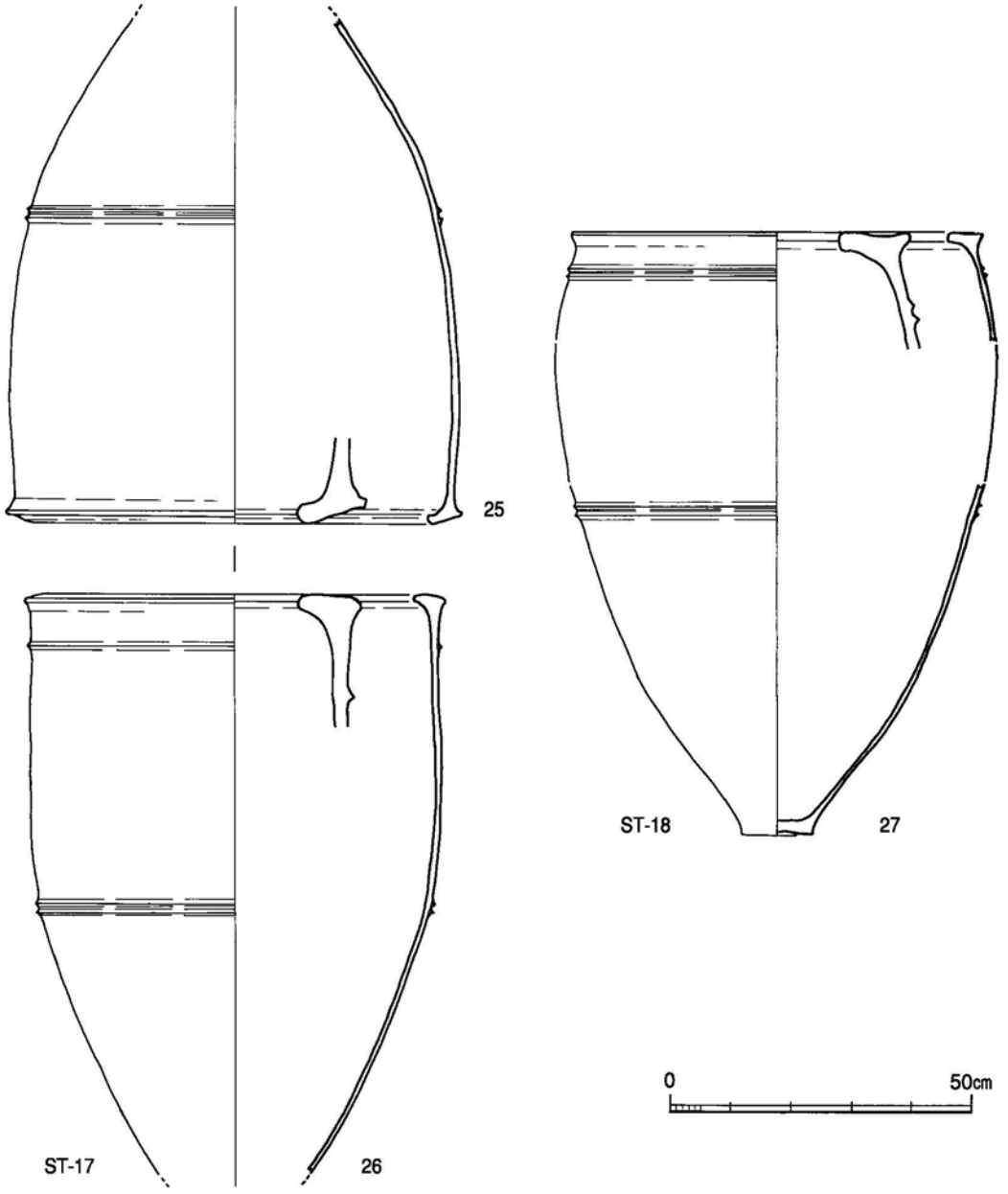


Fig.17　17・18号甕棺実測図（1／12）

明瞭でないが、口縁部と凸帯はヨコナデ、内面は押圧ナデ、外面はナデ調整。胎土には多くの微細～石英祖砂粒と少量の雲母微細、シャモット様の赤褐色粒を含む。色調は明淡橙色。

下甕(22)は、口径64cm、底径14.8cm、器高が94.6cmの大型の甕。T字状の口縁部は小さく外傾し、内唇は厚く張り出す。上位がわずかに膨らむ砲弾形の胴部中位には高い２条の三角凸帯が付き、肉厚の底部は上げ底気味になる。調整は口縁部と凸帯部がヨコナデ、内面は押圧ナデ。凸帯部～胴部下半には煤様の黒色顔料痕があり、全面に塗布した可能性がある。胎土には多くの砂粒と少量の雲母粒、赤褐色粒を含む。色調は淡黄白色～淡黄橙色。全体に摩滅が著しい。

16号甕棺墓　ST－16(Fig.14･15　PL.9･16)

16号甕棺墓は、調査区の東側に拡がるⅠ群中の北東端にある接口式の成人墓で、上下甕ともに大型の甕を用いている。西方２ｍの距離には17号甕棺墓があり、15号甕棺墓とともに小群（Ⅰ－１群）を構成している。墓壙は長辺が約230cm、短辺が100cmの長楕円形プランを呈し、壙底は甕の形状に合わせたように浅く窪んでいる。甕棺は、この墓壙底に密着して９°の傾斜で下甕を埋置し、その上を上甕で覆蓋している。合口部に粘土等による目貼りは施していない。主軸方位は、Ｎ－83°－Ｅにとり、17号甕棺墓とは直交するようにして位置している。

上甕(23)は、大型の甕で口縁部と底部を欠く。胴部凸帯径は62.6cm、現存高は54.4cm。砲弾形の胴部中位には2条のコ字凸帯が巡る。胎土は精良で終了の微細～小砂粒を含み、焼成は堅緻。色調は内面が淡黄橙～明橙色、外面は明黄橙色で黒斑がある。

下甕(24)は、口径63cm、底径12cm、器高が90cmの大型の甕である。口縁部は肉厚したＬ字状をなす。倒卵形の胴部は上半がストレートに立ち上がるが、シャープな三角凸帯が巡る口縁部下は緩やかに内湾する。また、胴部中位には２条のコ字凸帯が巡る。摩滅が著しいが、口縁部と凸帯部はヨコナデ、内面は押圧ナデ、外面はナデ調整。胎土には多くの微細～小砂粒と少量の石英祖砂粒と雲母微細を含む。色調は内面が淡明黄色、外面は淡黄橙色。

17号甕棺墓　ST－17(Fig.16･17　PL.9･16)

17号甕棺墓は、調査区の東側に拡がるⅠ群中の北西端にある接口式の成人墓で、上下甕ともに大型の甕を用いている。東方２ｍの距離には16号甕棺墓が主軸線を直交するようにしてあり、南方４ｍにある15号甕棺墓とともに小群（Ⅰ－１群）を構成している。墓壙は長辺が218cm、短辺が105cmの長楕円形プランを呈し、壙底は甕の形状に合わせたように浅く凹レンズ状に窪んでいる。また、上甕側には小さなプラット面があり、浅い２段掘り状の形状をなしている。甕棺は、この墓壙底に密着してほぼ水平な２°の傾斜で埋置されている。合口部に粘土等による目貼りは施していない。主軸方位は、Ｎ－４°－Ｅにとる。

上甕(25)は、口径76cm、現存高が83.6cmの大型の甕。逆Ｌ字状の口縁部は上縁に弱い段を作って外傾し、外唇は水平に小さく摘み出す。砲弾形をなす胴部の上半はストレートに立ち上がり、中位にシャープな２条の三角凸帯が巡る。摩滅が著しいが、口縁部内唇に黒色顔料痕が僅かに残っている。口縁部と凸帯部はヨコナデ、内面は押圧ナデ。胎土には細～石英中砂粒と雲母粒、シャモット様の赤褐色粒を含む。内面は淡黄色、外面は淡黄橙色。

下甕(26)は、口径75cm、現存高が96cmの大型甕である。水平に整えた逆Ｌ字状の口縁部は厚く、内唇の張り出しも弱い。胴部は砲弾形で、上半はストレートに立ち上がる。口縁部下に１条、胴部中位に２条の三角凸帯が巡る。口縁部内外と胴部中位にスス様の黒色顔料痕が観察され、全面に塗布していた可能性がある。口縁部と凸帯部はヨコナデ、内面は押圧ナデ調整で黒斑がある。胎土は微細～石英祖砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は内面が淡黄色、外面は淡黄～黄橙色。

18号甕棺墓　ST－18(Fig.16･17　PL.9･16)

18号甕棺墓は、調査区の西縁に拡がるⅡ群の北側にある単口式の成人墓で、南へ８ｍの距離には

6号甕棺墓が主軸線を縦列するようにして位置している。墓壙は長辺が147cm、短辺が85cmの不整な楕円形プランを呈している。甕棺は、この墓壙底に密着して22°の傾斜で埋置されている。口縁部下の壙底に木蓋等の装着痕や粘土等による目貼り痕はない。削平による消失の大きさを勘案すると鉢などで覆蓋をした可能性も考えられる。主軸方位は、ほぼ磁北位のN－0.5°－Eにとる。

甕棺(27)は、口径が68～70cm、底径が11.8cmの大型の甕で、器高は100cmほどになろう。T字状の口縁部は内唇が強く張り出し、一見逆L字状をなす。水平に整えた口縁部の上縁は浅い凹レンズ状をなす。胴部は倒卵形をなし、上半は小さく膨らんで内湾する。口縁部下と胴部中位に2条の三角凸帯が巡り、底部は上げ底になる。摩滅が著しいが口縁部と凸帯部はヨコナデ、内面は押圧ナデ。胎土は精良で微細～小砂粒とシャモット様の赤褐色粒を含み、焼成は堅緻。色調は明橙色。

3．土　壙（SK）

土壙は、5基を検出したが、その中には結果的に溝遺構と考えられるものもある。反対に遺物に出土しない不整形な落ち込みや溝遺構に付帯しているようなものもあり、正確には把握できていない。その分布は地形と調査区上の制約に因るものか溝遺構に沿うように散逸的な状況を示しているが、これもその在り様を性格に語っているとは言い難い。また、プラン的には、ほとんどが不整形な平面形をなしており、規則的なプランはなく、規模も大小様々である。

1号土壙　SK－01(Fig.18･19･20　PL.10)

1号土壙は、調査区の中央部にあり、3号溝の北縁に重複している。また西壁は1号溝の東壁と重なり、南壁上には7号甕棺墓が掘り込まれている。平面形は東西長が2.8m、南北長が3m余の不整形プランで、東壁にはくびれ状の内弯があり瓢状をなす可能性もある。壙内には中期後半の壷や甕、鉢などがまとまって投棄されていた。祭祀的土壙の可能性も否定できない。断面形はレヴェルなどの計測記録が失われており、復原できなかった。

28～30は口縁部が鋤先状をなす壷である。28は口径が25cm、底径8.2cm、器高は31.1cm。頸部は直口した後に緩やかに外反して立ち上がり、鋤先状の口縁部は張り出した外唇が小さく外傾する。胴部は扁平な倒卵形をなし、最大径部に1条のM字凸帯が巡る。色調は淡明黄褐色。29は口径が39.4cm。頸部はストレートに外反し、水平な口縁部の外唇端部は凹線状に浅く窪む。色調は淡黄色。30はやや扁平な倒卵形をなす胴部の最大径部に1条の三角凸帯を巡らしている。頸部径は17cm、凸帯部径は42cm。色調は外面が黄灰色～淡灰黒色、内面はくすんだ黄灰色。いずれも外面は丁寧なナデ、内面は押圧ナデ。胎土は良質で多くの微細砂～小砂粒と少量の石英祖砂粒、雲母微細を含む。焼成は良好。31は口径が24.7cm、底径7.9cm、器高が28cmの丹塗無頸壷である。上縁を水平に仕上げたL字状の口縁部は外唇を小さく摘み出す。胴部は短い偏球形をなし、口縁部下に1条の三角凸帯を巡らしている。外面は全面をタテ研磨、ヨコ研磨で丁寧に丹彩して仕上げている。胎土は精良で、焼

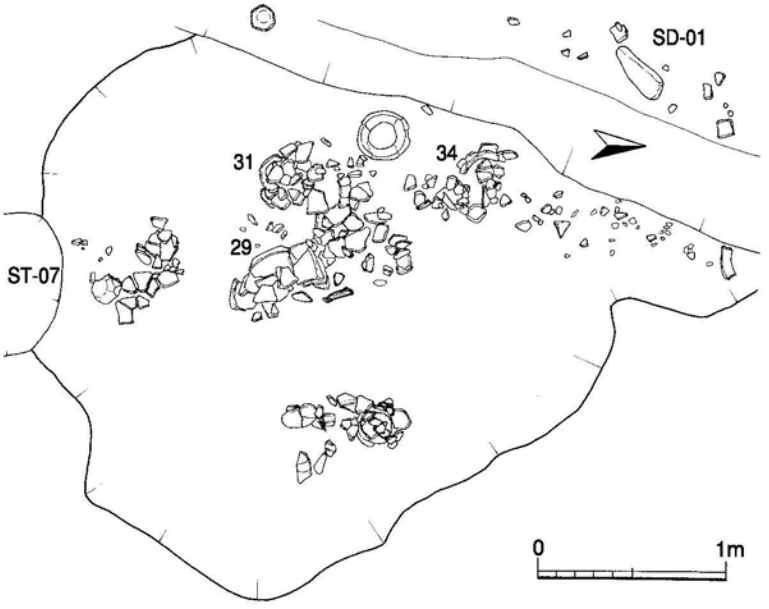


Fig.18　1号土壙実測図（1／40）

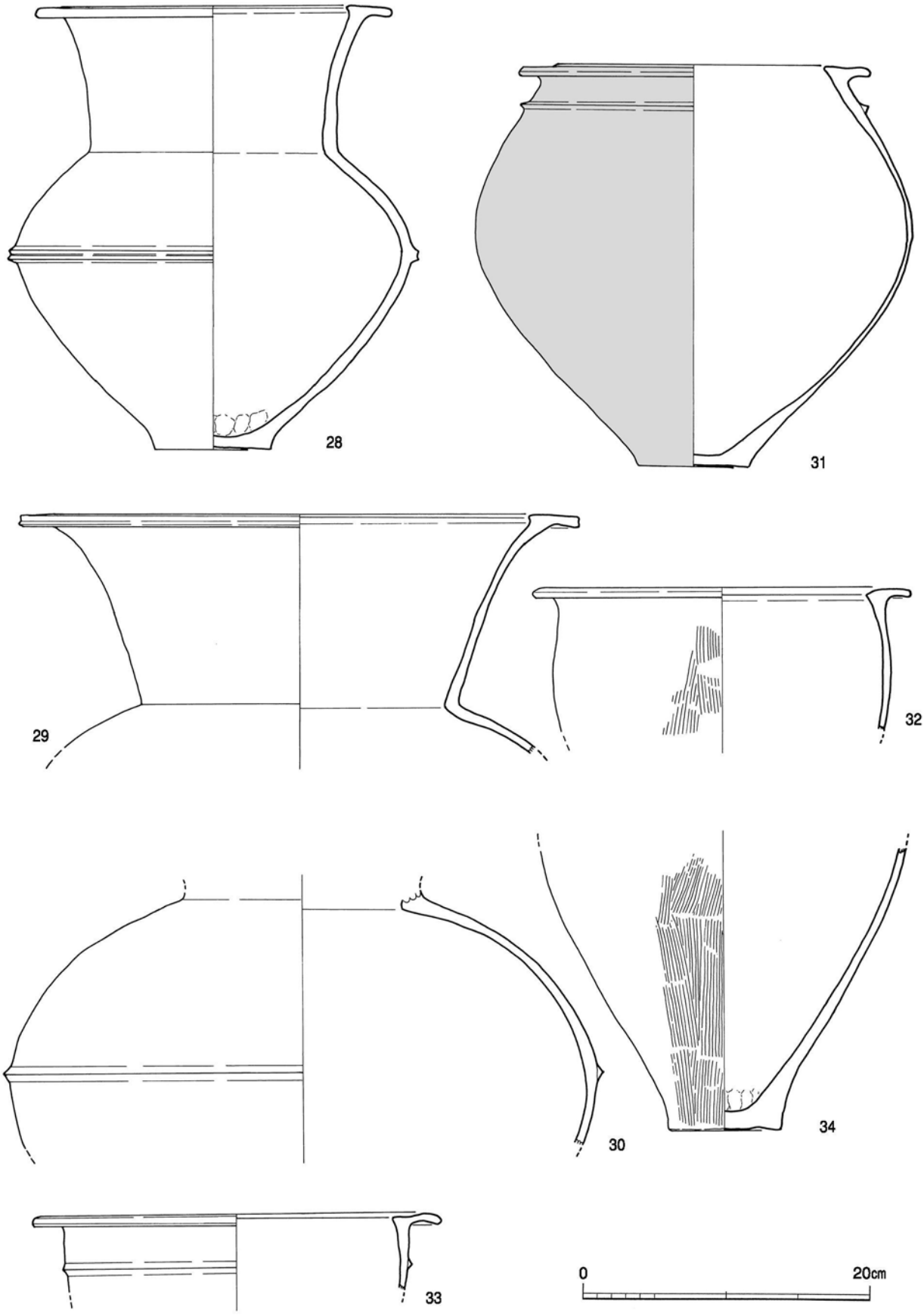


Fig.19　1号土壙出土遺物実測図1（1／4）

成は良好。32～35は甕である。32は口径が26.4cm。L字状の口縁部はやや外弯ぎみに開く。外面は粗いハケ目、内面はナデ。淡黄橙色。33は口径が28.8cm。L字状の口縁部は外唇を小さく下方に摘み出し、口縁部下には1条の三角凸帯が巡る。色調は明黄橙色で、二次焼成による赤変がある。34は底径が８cmで胴部は倒卵形をなす。外面は粗いハケ目、内面は押圧ナデ調整。外面は淡灰褐色、内面は淡黄橙色。35は口径が31cm、底径7.8cm、器高は36.5cm。口縁部は水平なL字状をなし、内唇の張り出しは小さい。上げ底ぎみの底部は肉厚で、倒卵形をなす胴部は口縁部直下に三角凸帯を１条巡らしている。口縁部はヨコナデ、外面はハケ目、内面は押圧ナデ調整。色調は明赤橙色～淡灰茶色で、内面には炭化物が付着している。いずれも胎土には多くの微細～石英祖砂粒と雲母微細を含み、焼成は良好。

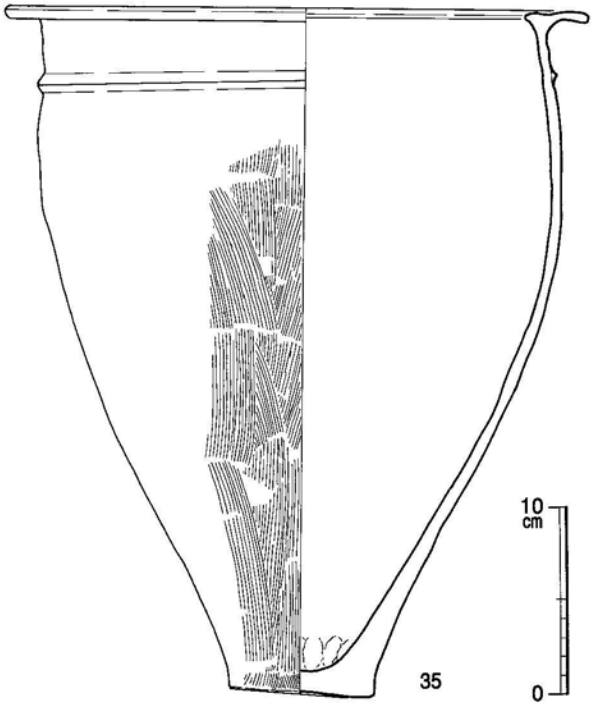


Fig.20　1号土壙出土遺物実測図2（1／4）

２号土壙　SK－02

(Fig.21･22･30　PL.11)

２号土壙は、調査区の北東隅にあり、１号溝の北端から3.5mほど東へ延びて北へ矩形に曲がっている。調査時は大型の土壙として理解されていたが、土壙と考えるには不整合さも否めない。第３次調査（2004年）の成果を勘案すると、２号土壙は結果的に１号溝から発した矩形溝とするのが妥当と考えられる。ただし、これがすぐ北に造墓されている16号甕棺墓や17号甕棺墓を取り囲む区画溝であるか否かは即断できない。南北幅は2.5mで壙内からは中期後半の壷や甕がまとまって出土した。断面形は計測記録が失われているために復原できなかった。

36･37は小型の鋤先口縁壷である。頸部は直口ぎみに外反して立ち上がり、短い鋤先状の口縁部は小さく外傾する。胴部は玉葱状の偏球形をなし、最大径部に１条の三角凸帯が巡る。い

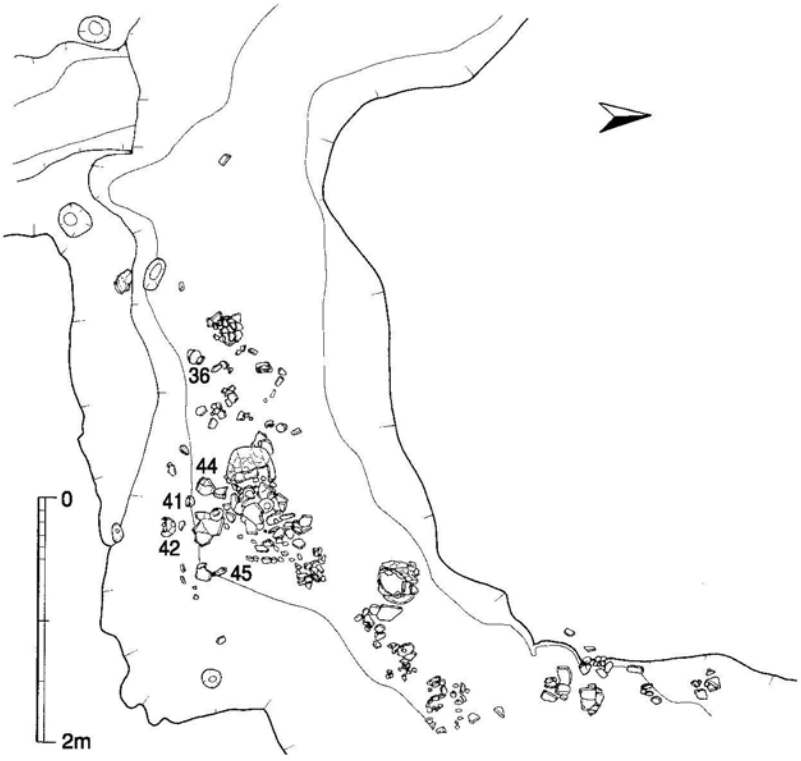


Fig.21　2号土壙実測図（1／60）

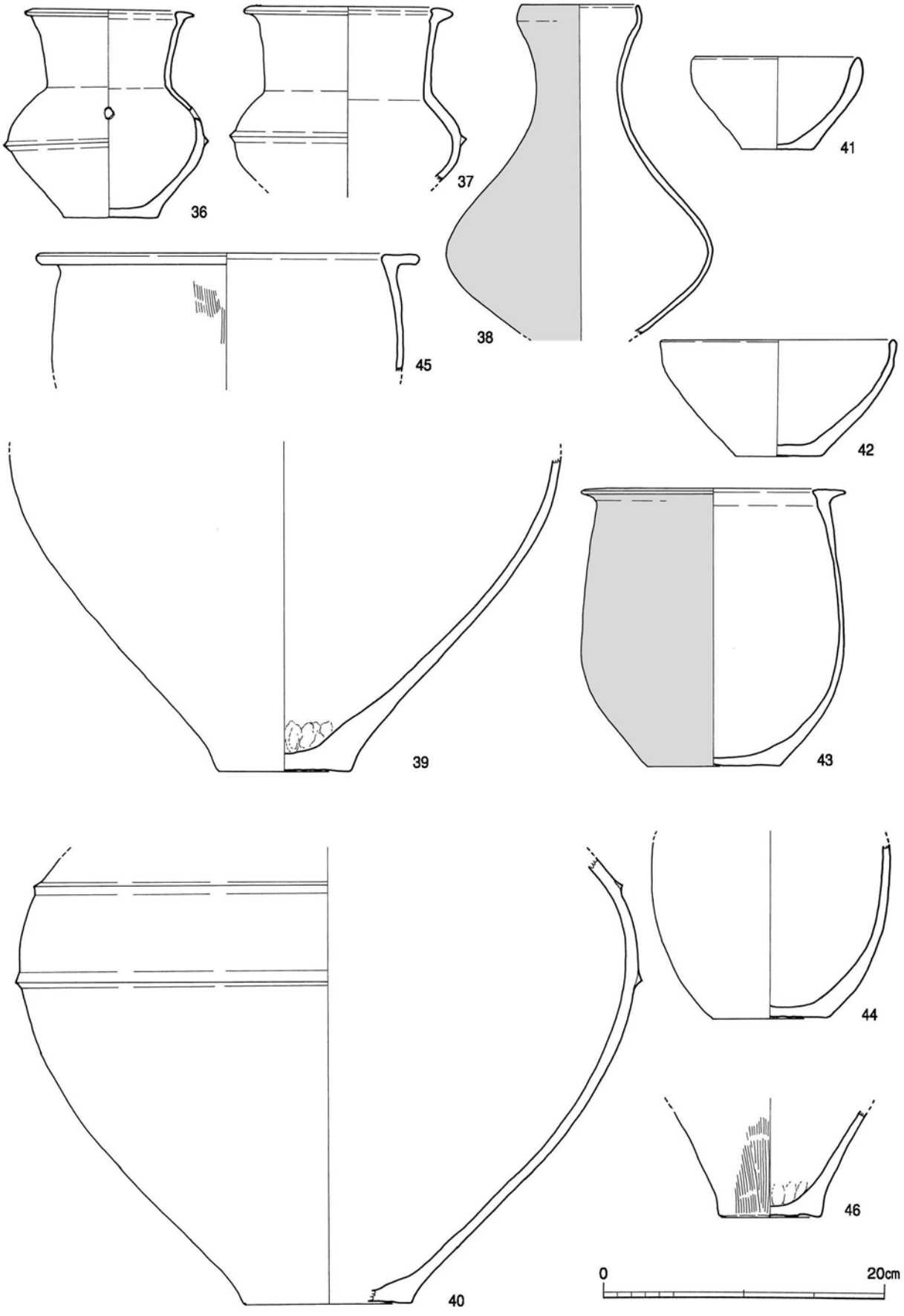


Fig.22　2号土壙出土遺物実測図（1／4）

ずれも胎土は良質で微細砂～石英中砂粒と雲母微細を含む。調整は口縁部と凸帯部がヨコナデのほかはナデ、内面は押圧ナデ。36は口径12.2cm、底径6.8cm、器高は15cmで肩部には6～9mmの円孔を焼成後に穿つ。暗黄色。37は口径が15cm。淡黄橙色。38は丹塗りの袋状口縁壷で、口径は8.5cm。袋状に内弯する口縁部は短く内傾する。頸部は細長く、胴部は張りの強い偏球形をなす。外面は口縁部と胴部上半がヨコ、頸部と胴部下半はヨコ方向の丹塗り研磨胎土は精良で小砂粒を含み、焼成は良好。外面は明赤橙色、内面は暗灰褐色。39･40は口縁部～胴部上半を欠いた壷で、口縁部は鋤先状をなそう。調整は外面が丁寧なナデ、内面は押圧ナデ。胎土は良質で多くの微細～小砂粒と石英祖砂粒、雲母を含む。39は底径9.8cm。40は底径が12cmでやや扁平な倒卵形には２条の三角凸帯が巡り、底部は上げ底になる。色調は外面が淡黄褐色、内面は淡灰褐色～灰黒色。41･42は鉢である。体部は扁平な半球形で、口縁部は直口する。調整は口縁部がヨコナデ、外面はナデ、内面は指頭押圧ナデ。41は口径11.9cm、底径5cm、器高は6.6cmで肥厚した口縁部下には研磨痕が残る。色調は暗黄褐色。42は口径16.9cm、底径6cm、器高は8.2cmで小さく摘み上げた口縁部下には浅い横凹線状の窪みがある。外面は暗黄褐色、内面は暗灰褐色。43･44は樽型の甕である。43は口径19cm、底径9.4cm、器高は19.8cm。Ｌ字状の口縁部は短く嘴状に端部が尖る。胴部は張りの弱い短胴で、底部は平底。外面は丹塗り研磨、内面は押圧ナデ調整。内面は淡褐色。44は底径が8.4cm。外面はナデ、内面は指頭押圧ナデ調整。色調は淡褐色～淡黄灰色。いずれも胎土は精良で微細～小砂粒と雲母を含み、焼成は堅緻。45･46は甕である。45は口径が27.4cm。口縁部はＬ字状をなし、胴部は短い砲弾形をなそう。46は上げ底状の底部で底径は7.4cm。外面にはススが付着し、淡赤茶褐色、内面は黄橙色。いずれも外面はハケ目、内面は押圧ナデ調整。胎土には多くの微細～小砂粒と少量の雲母を含み、焼成は良好。

65は長さ6cm、幅3.9cm、厚さが1.3cmの頁岩質の磨製片刃石斧である。66は両端を欠いた玄武岩質の太型蛤刃石斧で、幅は8.1cm、厚さは5cmほどになろう。

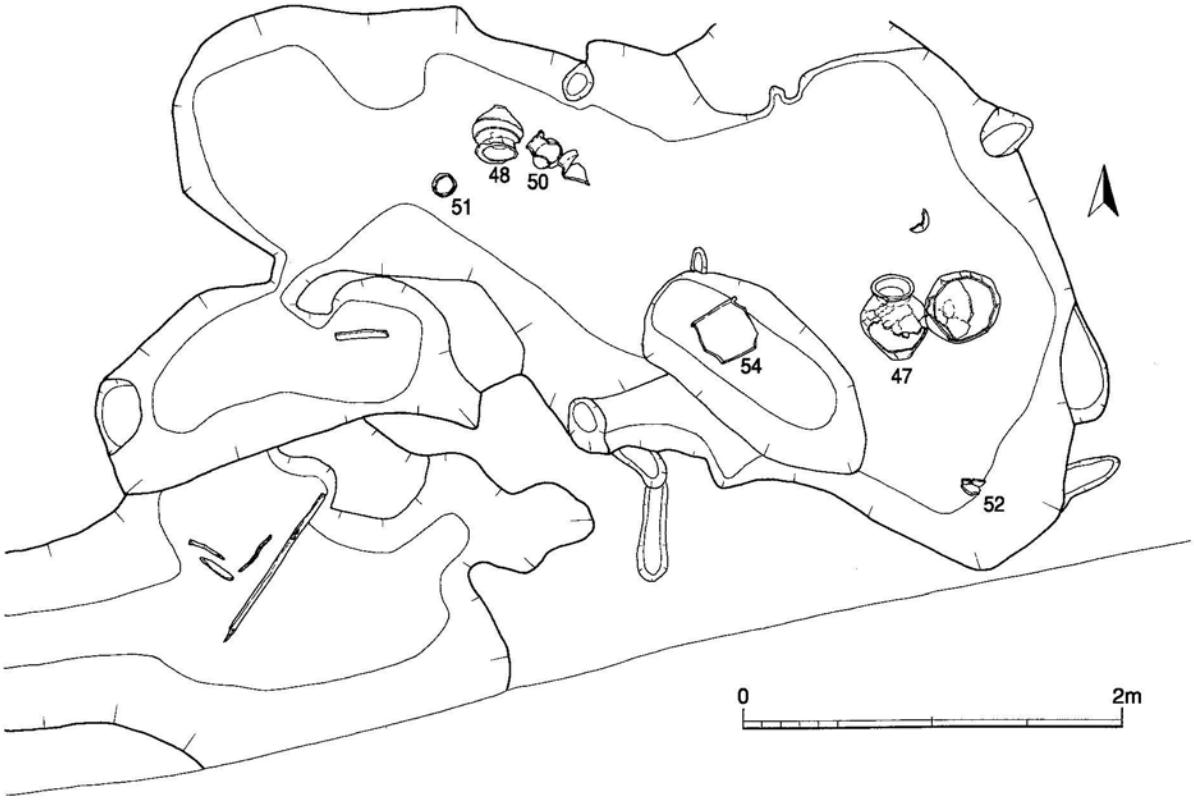


Fig.23　3号土壙実測図（1／40）

3号土壙　SK－03(Fig.23･24･25　PL.12･13)

3号土壙は、調査区の南東部にある長辺が5.2m、短辺が1.8～2.5mの不整な長楕円形プランを呈している。壁面は北壁の一部を除いて緩やかに立ち上がり、南東壁に沿って長さ140cm、幅70cm、深さが15～20cmの小土壙がある。壙内には東西の2ヶ所に分かれて壷や鉢の完形品が投棄されており、祭祀的土壙の可能性も否定できない。

47･48は大型の鋤先口縁壷である。頸部は短く外反し、胴部は扁平な倒卵形をなす。47は口径22.1cm、底径8.8cm、器高は38.2cm。頸部には7～8本を一単位とする暗文が4～5cmの間を取って施文される。口縁部外唇は小さく外傾する端部は弱い稜を作って横凹線状をなしている。底部は上げ底で胴部には1条のM字凸帯が巡る。色調は暗褐色。8は口径26.4cm、底径9.8cm、器高は43cm。

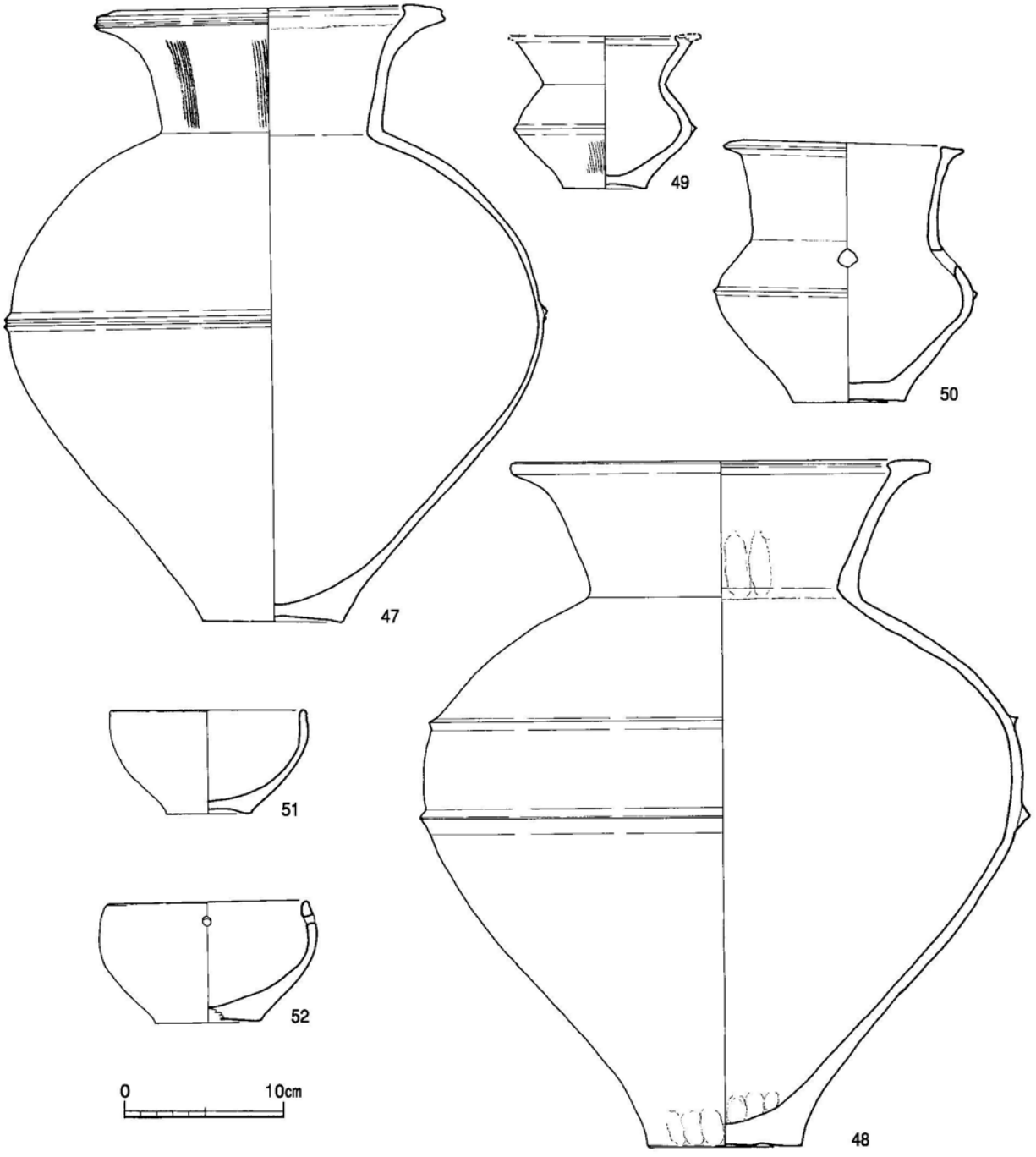


Fig.24　3号土壙出土遺物実測図1 (1／4)

鋤先状の口縁部は上縁を水平に整え、外唇は伸びやかに内唇は短く鋭利に摘み出す。胴部はやや扁平な倒卵形をなす。胴部最大部と肩部に三角凸帯が巡り、肩部凸帯状に穿孔がある。色調は淡橙色。いずれも胎土は精良で微細砂と雲母微細を含み、焼成は堅緻。49･50は小型の鋤先口縁壷で、玉葱状をなす偏球形の胴部には１条の三角凸帯が巡る。49は口径11cm、底径5.3cm、器高9.5cm。頸部は大きく外反し、口縁部は内唇が強く張り出す。50は口径15cm、底径7.1cm、器高16.3cm。頸部は緩やかに外反し、短い鋤先口縁はわずかに外傾する。凸帯上に焼成後の穿孔がある。いずれも胎土は砂粒を含み、暗褐色。51･52は体部が扁平な半球形をなす鉢。51は口径12.3cm、底径5.4cm、器高6.5cm。口縁部は直口し、端部は丸く収まる。口縁部下に籾圧痕が残る。色調は赤褐色。52は口径12.5cm、底径6.5cm、器高は7.5cmで内傾する口縁部下に一対の円孔がある。内面が指頭押圧ナデ、外面はヨコナデ～ナデ。暗褐色。53･54は口縁部がＬ字状の甕である。53は口径が42.8cm。口縁部下にＭ字状凸帯が１条巡る。内面は押圧ナデ、外面はタテナデで全体にスス様の黒色顔料の塗布痕があり、甕棺に転用品か。淡黄灰色。54は口径が40.5cm。口縁部下には１条の三角凸帯が巡り、胴部は倒卵形をなす。外面はハケ目、内面はナデ調整。暗褐色。胎土は細～小砂粒を含む。

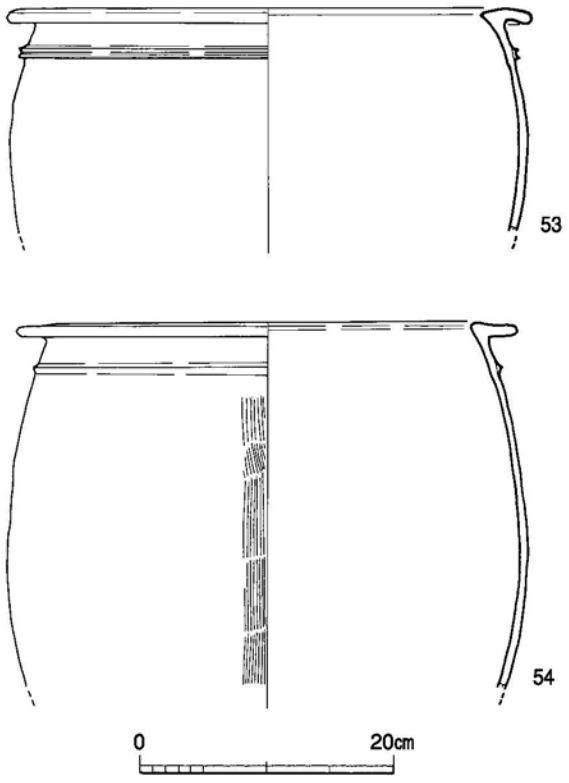


Fig.25　3号土壙出土遺物実測図2(1／6)

４号土壙　SK－04(Fig.26･27　PL．13)

４号土壙は、調査区の西縁に位置する小土壙で、南へ4.5mの距離には18号甕棺墓がある。平面形は長辺が115cm、短辺が100cmほどの不整な方形プランをなそう。図示しなかったが、深さは20cm余で、断面形は箱形をなす。覆土中からは前期の土器小片が出土している。

55～58は壷である。55は小形品で、肩部に2条の細かい横凹線が巡る。59～61は鉢。61は如意状をなす口縁部の外唇下端にヘラ工具による刻目を施文し、体部との境に緩やかな段を作る。62は底径が13.2cmの甕。胎土には石英砂を含み、暗褐色。

５号土壙　SK－05(Fig.26　PL．13)

５号土壙は、調査区の北西縁に位置する溝状の不整形な土壙で、全容は明らかでない。南北幅は65cm。壙底は東壁側から階段状に３段の段差がある。

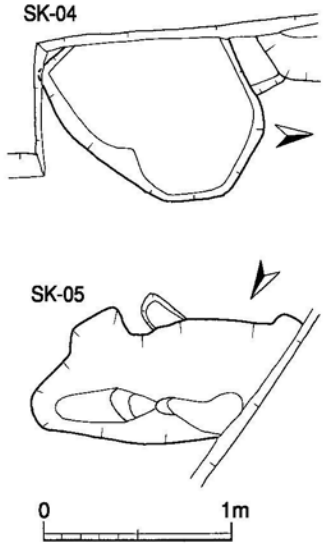


Fig.26　4･5号土壙実測図（1／40）

４．溝遺構（SD）

溝遺構は、大小合わせて４条を検出した。しかし、２号土壙としたものや短く分岐して延びるもの等の理解によって幾筋かの増加が見込まれるが、大局的には調査区を南北に延びる１号溝とその西に沿うように南北流する２号溝中心に拡がっているものと推測される。一方、

溝底には木片等が遺存し、黒褐色粘質土の堆積が認められることから水流の跡が窺える。２条の溝は東から湾入する谷を遮るように位置しており、この流れが水耕等に伴うものかあるいは集落域に伴うものかは明らかでない。

１号溝　ＳＤ－01(Fig.4·30)

１号溝は、調査区の中央部を緩やかに蛇行しながら南北流する溝幅1.5～2ｍの大溝である。溝は15号甕棺墓のある北端で一旦途切れ、1ｍほどの間をおいて再び北へ延びている。この途切れた部分が矩形溝内に入る陸橋かあるいは谷側へ繋がる通路的なものかは即断しがたい。また、中央部の8号甕棺墓の東から細流に分岐して３号溝になる。壁面は概ね緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。深さは30～45cm。

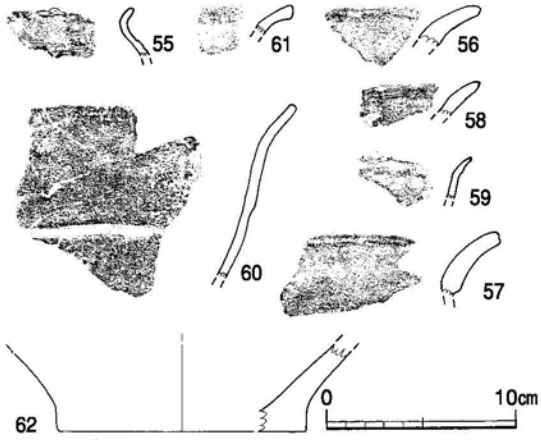


Fig.27　4号土壙出土遺物実測図（1／4）

67は頁岩質の磨製石剣である。鎬は微稜で刃部は両端から鋭利に研ぎ出す。

２号溝　ＳＤ－02(Fig.4)

２号溝は、調査区の南西端を南北流する溝で、溝幅は70～130cm。溝は１号溝と2.5～4ｍの間をおいて南から17ｍほど沿うように北流した後、緩やかに屈曲して弧を描くように西へ延びていく。その北端には溝底に浅い段を作り、上縁には18号甕棺墓が掘り込まれている。中期前半には埋没したものと考えられる。深さは15～20cmで、壁面は緩やかに立ち上がる。

３号溝　ＳＤ－03(Fig.4)

３号溝は、調査区の東部にある溝幅が40～70cmの比較的細い溝である。溝は、東から湾入する谷

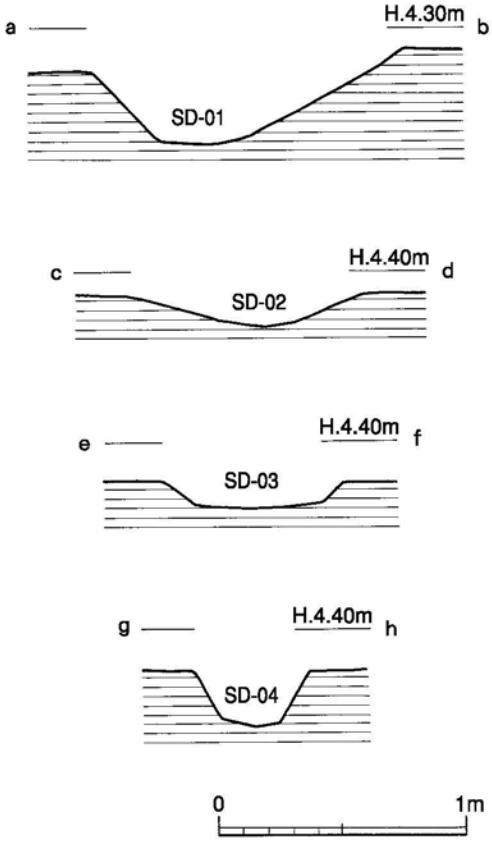


Fig.28　1～4号溝断面図（1／30）

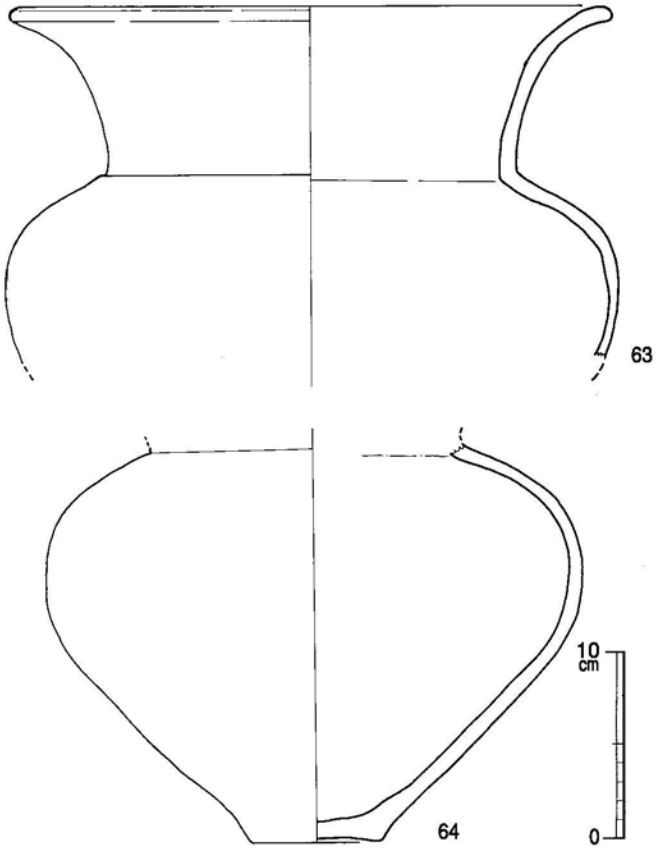


Fig.29　包含層出土遺物実測図（1／4）

を遮るようにして北に延び、8号甕棺墓の東で１号溝に流れ込む。この間に２ヶ所で１号土壙と３号土壙に削平されており、中期中葉頃までに１号溝と共に埋没したものと考えられる。

４号溝　ＳＤ－04(Fig.4)

４号溝は、調査区の中央部西寄りにあり、１号溝と２号溝に挟まれて位置する。溝は3ｍほど東北に延びて北へ「く」字状に屈曲する。全長は5ｍで、深さは20～25cm。壁面は緩やかに立ち上がり、逆台形の断面形をなす。

５．包含層の遺物 (Fig.29･30　PL.18)

調査区内には甕棺墓や溝のほかに柱穴等があり、その遺構上にある遺物包含層からも石器などの遺物が出土した。また、この中には図化された前期から中期の壷や甕があるが、記録の紛失や注記の混乱から帰属する遺構が明らかにできなかったために割愛した。

63･64は胴部が玉葱状の偏球形をなす壷である。63は口縁部が大きく外反し、頸部には18～20本を一単位とする暗文を施文している。淡明橙色。64は底径が6.8cmで色調は淡明赤褐色。いずれも胎土は精緻で、微細砂と雲母微細を含み、焼成は堅緻。調整は外面が丁寧なナデ、内面は押圧ナデ。

68は基部を欠く片刃石斧である。幅は5.1cm、厚さは0.8cmで刃部の研ぎ出しは未完了。69は凝灰岩質の石製品で、直径が1.5～1.6cmのボタン状をなす。厚さは2.5mmで、真ん中に径1mmの一対の円孔がある。70･71は黒曜石製打製石鏃である。70は基部幅が1.3cm、長さが2.5cmの三角鏃。71は鋸歯の凹基式鏃。

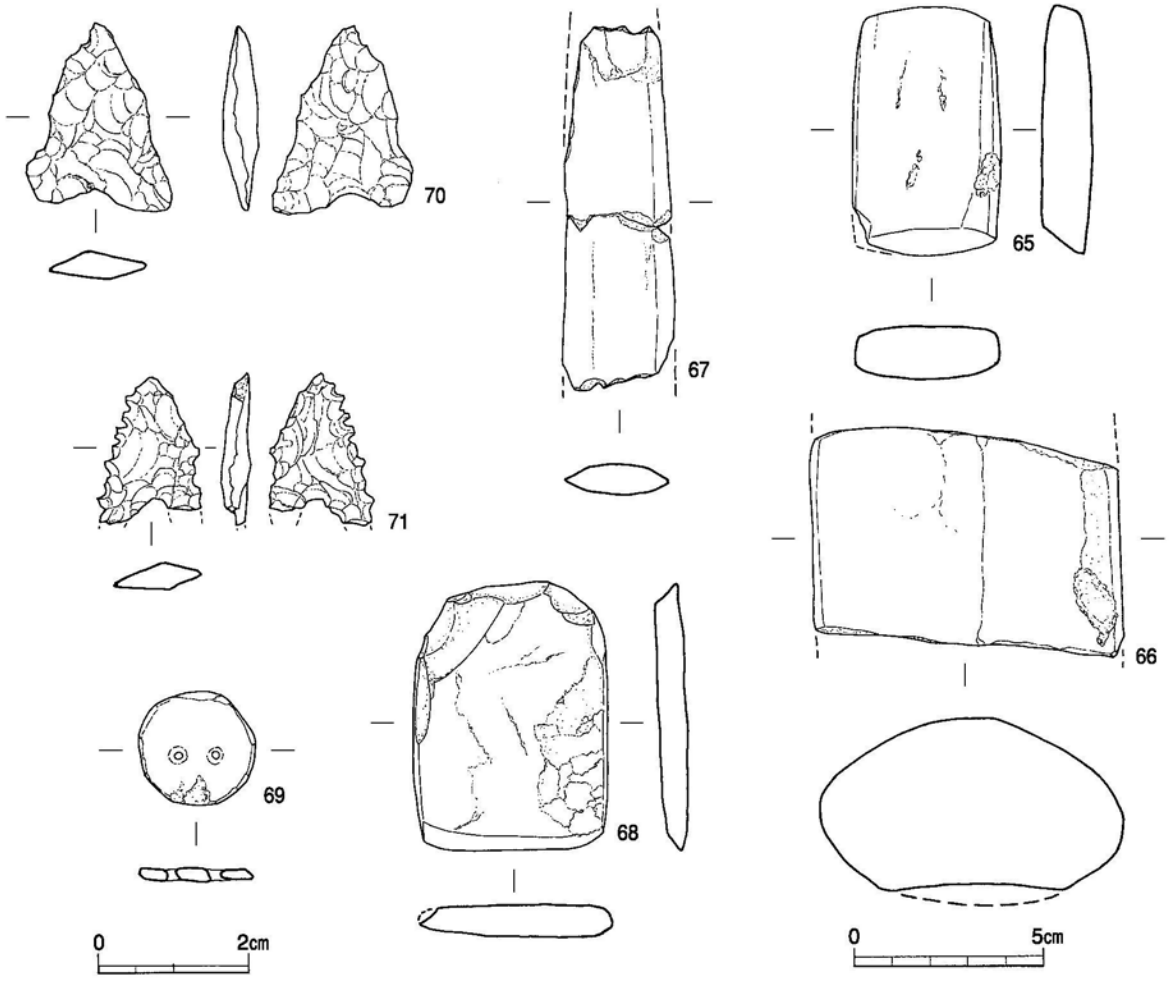


Fig.30　2号土壙・1号溝・包含層出土石器実測図（1／1・1／3）

Ⅲ. お わ り に

原東遺跡の発掘調査以来四半世紀の時が経ち、ここに調査の成果を報告することができた。しかし、この報告には調査担当者の詳細な所見と見識が反映されず、遺跡から提供された情報を網羅しているとは言い難い。ここでは明らかになった成果を簡単に整理して原東遺跡を理解する参考としたい。

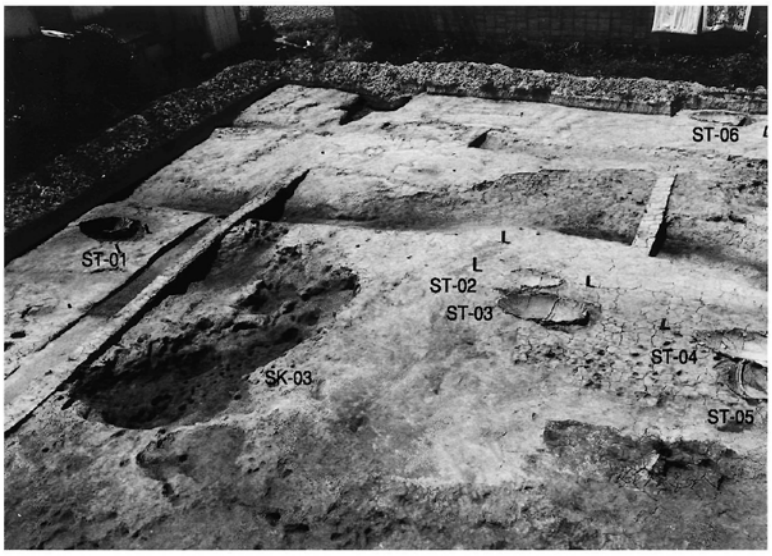
原東遺跡第１次調査では、甕棺墓と土壙、溝を検出した。これらの遺構は弥生時代前期から中期後半のきわめて限られた時間帯の中に収まり、平野の開口部に立地する微高地の活用と消長の一端を物語っていると云えよう。この微高地上では、まず初めに調査区の西縁で土壙が開削される。４号土壙からは前期の壷や甕・鉢片が出土しており、この期に微高地上で何らかの人的活動が開始されたことが窺える。次ぎに、東から弯入する谷を遮るように幅広の１号溝が開削される。この溝は、緩やかに蛇行しながら北流し、北部では矩形に分流して更に北流する。この溝は水流痕が窺えることから水路的な機能が容易に想起されるが、それが単に集落域を区画するものかあるいは水耕などの生産活動に伴うものかは即断しがたい。時期的には土壙の開削期に遡る可能性があり、8号甕棺墓や15号甕棺墓の造営時には完全に埋没して機能を失している。ただし、２号土壙とした１号溝から分流した矩形溝からは甕棺墓にきわめて近接した時期の壷や甕が出土しており、その機能と廃棄時期の検討を要する。調査担当者は、これと同じような状況を示す１号・３号土壙を含めて祭祀土壙という文字を記録されており、その機能を検討されていたようである。

最後に更地化した微高地上に甕棺墓群が造墓される。この甕棺墓群は幾つかの小群にグループ化される。大きくは調査区の中央を１号甕棺墓から2～5号甕棺墓、8号・15号・17号甕棺墓と南北に並ぶ17基の甕棺墓群（Ⅰ群）と調査区の西縁に並ぶ6号・18号甕棺墓の一群（Ⅱ群）に分けられる。このうちⅠ群は1号甕棺墓、2～5号甕棺墓、8～14号甕棺墓、15～17・19号甕棺墓に細分される。この小群は家族墓的小群として捉えられ、その集合体が一村を構成して列埋葬的墓域を形成したものと理解される。この微高地上の一群を平野内で俯瞰すると、室見川右岸の吉武遺跡群を頂点に、平野奥に東入部遺跡、平野開口部の東口を飯倉Ｃ（飯倉唐木）遺跡、西口を野方久保遺跡、そして中央の独立丘陵上に有田遺跡が拠点的集団として平野内を支えていたと考えられる。原東遺跡に甕棺墓を造営した集団は、地形的に飯倉Ｃ遺跡の集団に属し、比較的早くから沖積平野内での生産活動をはじめた集団として理解することができよう。この微高地上での造墓活動は中期中葉に始まり、後葉の早い段階で終焉を迎えた短い期間に限られ、その後の消長は調査資料の増加を待って再検討をしたい。

遺構No.		合口形態	甕形態	墓壙			主軸方位	埋置傾斜	時期	備考
				長辺(cm)	短辺(cm)	深(cm)				
ST-01	成人	接口	甕+甕	240	140	70+α	N-3°-W	36°	Ⅱb	浅い3段掘り墓壙
ST-02	中人	接口	甕+甕	122	68	25+α	N-2°-E	0°	Ⅲa	ST-03より新しい
ST-03	成人	接口	甕+甕	186	97	35+α	N-1.5°-E	4°	Ⅲa	ST-02より古い
ST-04	成人	接口	鉢+甕	181	85+α	35+α	N-1°-W	3°	Ⅲa	ST-05より新しい
ST-05	成人	接口	鉢+甕	140	90	30+α	N-13°-W	20°	Ⅱc	ST-04より古い
ST-06	成人	単口	甕	157	94	35+α	N-2.5°-W	10°	Ⅲa	木蓋
ST-07	小児	合口？	壺?+壺	85	75	30+α	N-45°-W	−6°	Ⅱc	SK-01より新しい
ST-08	成人	単口	甕	138	91	40+α	N-1.5°-W	−2°	Ⅲa	木蓋？SD-01より新しい
ST-09	成人	接口	壺+甕	210	190	35+α	N-69°-W	7°	Ⅲa	墓壙内に供献土器（?）
ST-10	成人	単口？	甕	—	—	20+α	N-23°-W	—	Ⅲa	消失顕著
ST-11	成人	接口	甕+甕	195	155	35+α	N-25°-W	1°	Ⅲb	2段掘り墓壙
ST-12	成人	単口	甕	148	110	25+α	N-11°-W	8°	Ⅲa	
ST-13	成人	単口	甕	188	97	45+α	N-0°-E	0°	Ⅲa	木蓋?
ST-14	成人	—	甕	77	65	15+α	N-28°-W	—		消失顕著
ST-15	成人	接口	甕+甕	175	73	35+α	N-1°-E	14.5°	Ⅲa	浅い2段掘り墓壙、1号溝より新しい
ST-16	成人	接口	甕+甕	206+α	100	50+α	N-83°-W	9°	Ⅲb	
ST-17	成人	接口	甕+甕	218	105	35+α	N-4°-E	2°	Ⅲa	浅い2段掘り状墓壙
ST-18	成人	単口	甕	147	85	30+α	N-0.5°-E	22°	Ⅲa	
ST-19	成人	接口	甕+甕	180	80	20+α	N-20°-E	9°	Ⅲa	第3次調査1号甕棺墓

Tab.1 甕棺墓一覧表

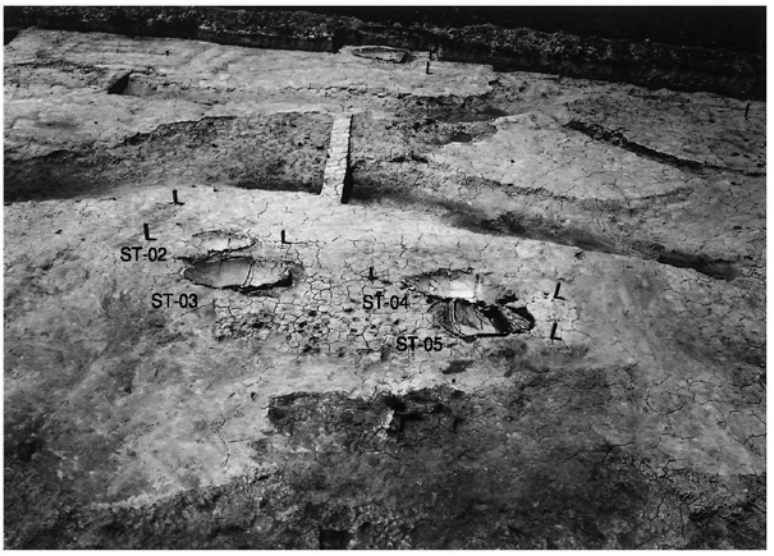
PLATES



(1) 調査区南側甕棺墓群（東より）

(2) 1号甕棺墓・3号土壙（北より）

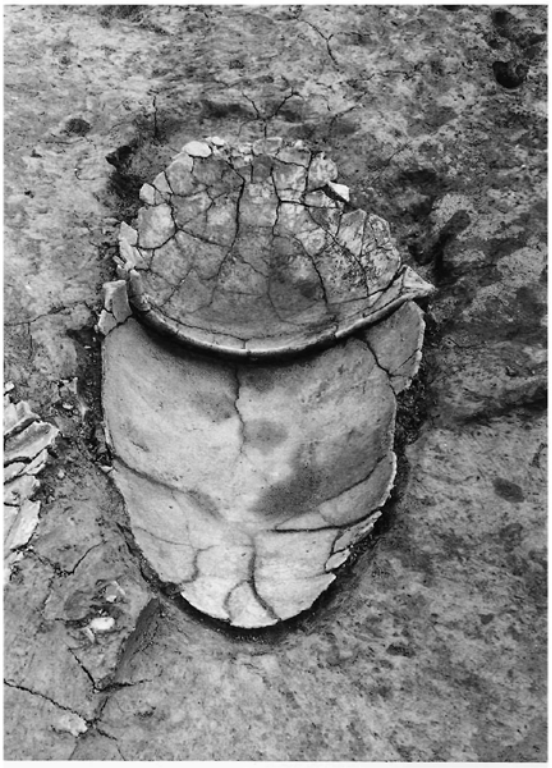
(3) 1号甕棺墓（北より）



(1) 2～6号甕棺墓（東より）

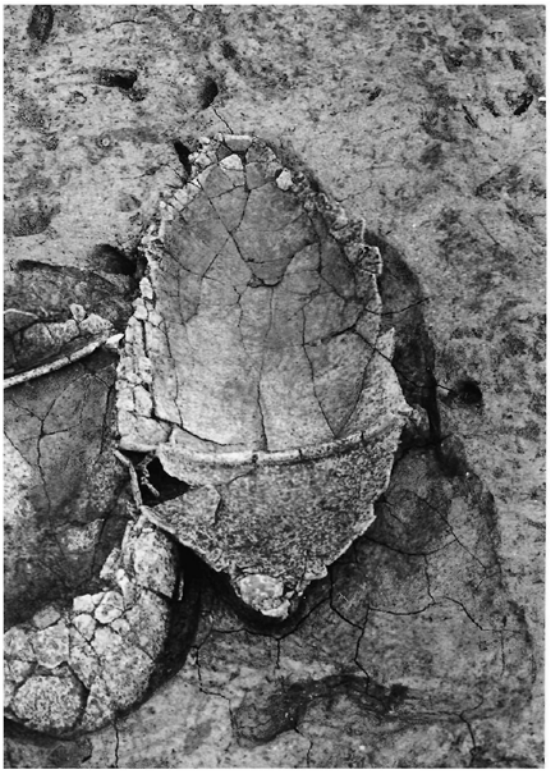
(2) 2・3号甕棺墓（南より）

(3) 2号甕棺墓（南より）

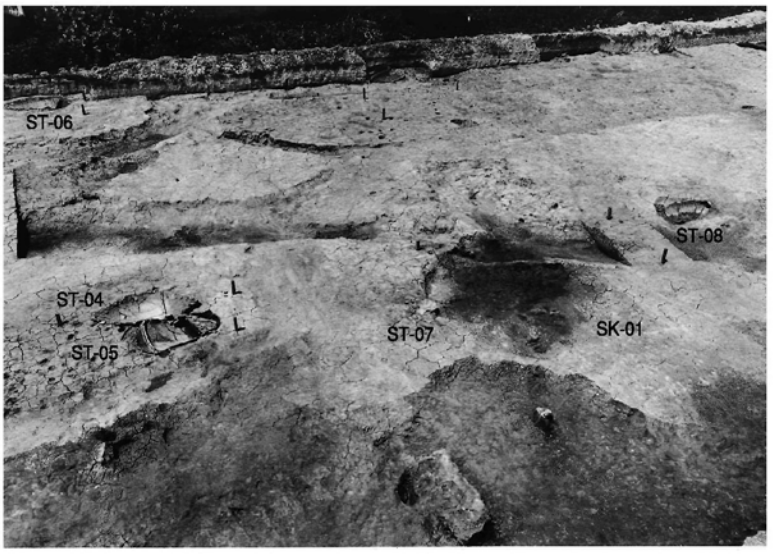


(1) 3号甕棺墓（南より）

(2) 4・5号甕棺墓（北より）



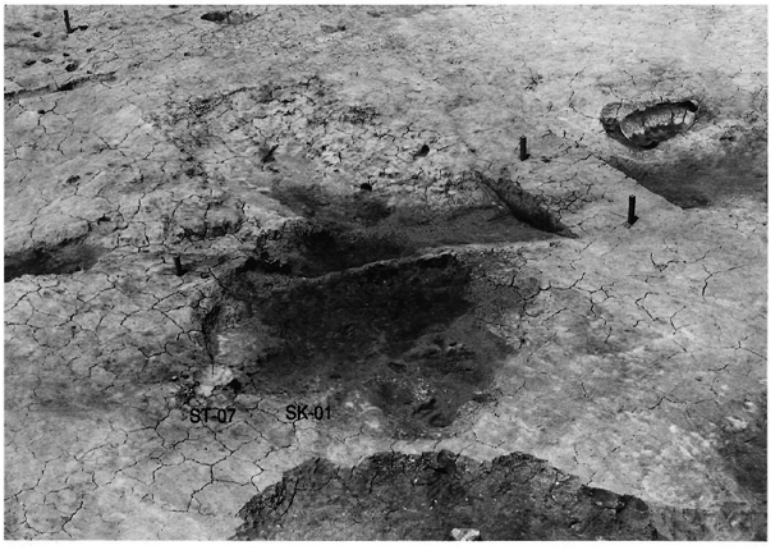
(3) 4号甕棺墓（北より）



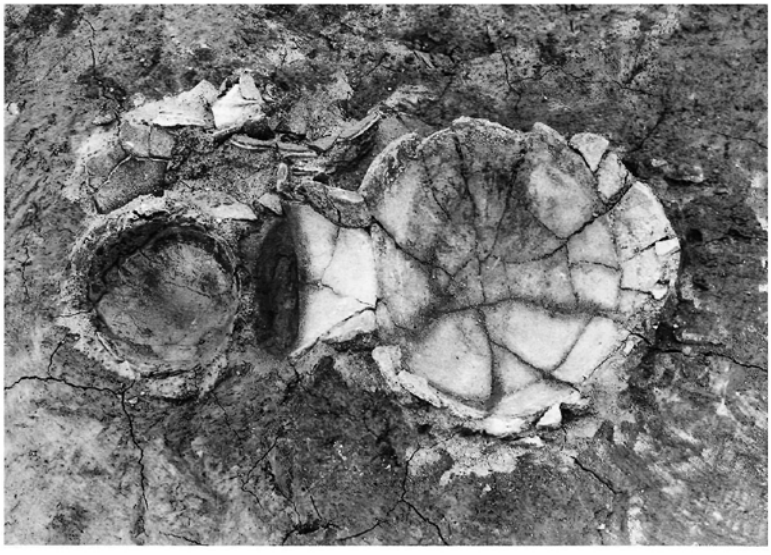
(1) 調査区中央部甕棺墓群（東より）

(2) 5号甕棺墓（北より）

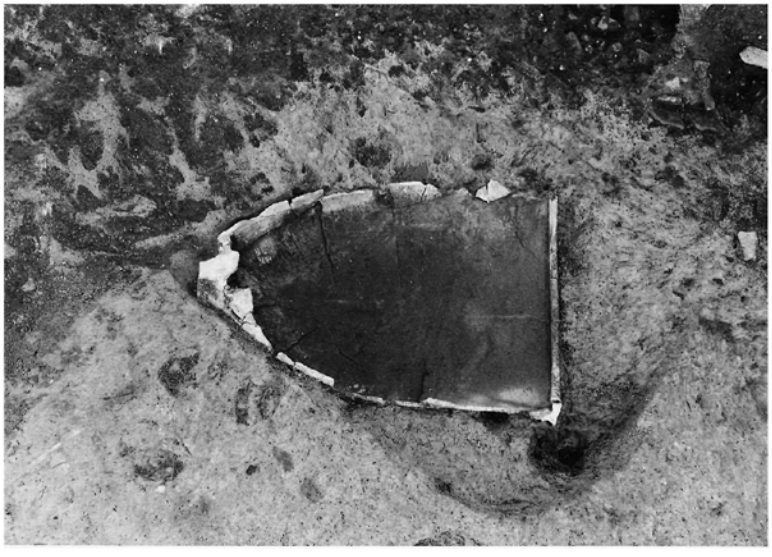
(3) 6号甕棺墓（東より）



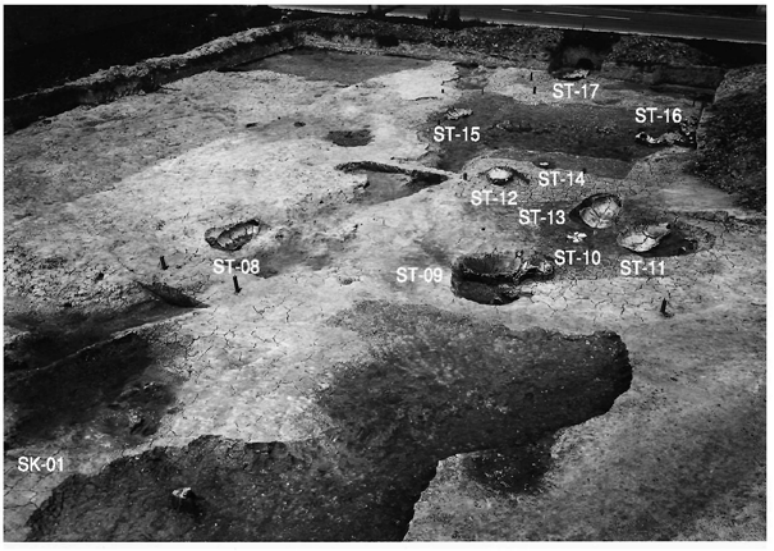
(1) 7・8号甕棺墓（東より）



(2) 7号甕棺墓（東より）



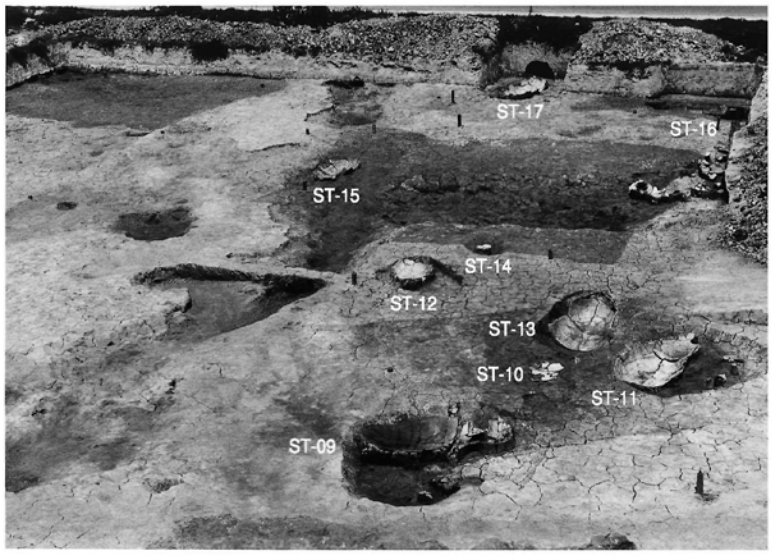
(3) 8号甕棺墓（西より）



(1) 調査区北側全景（南より）

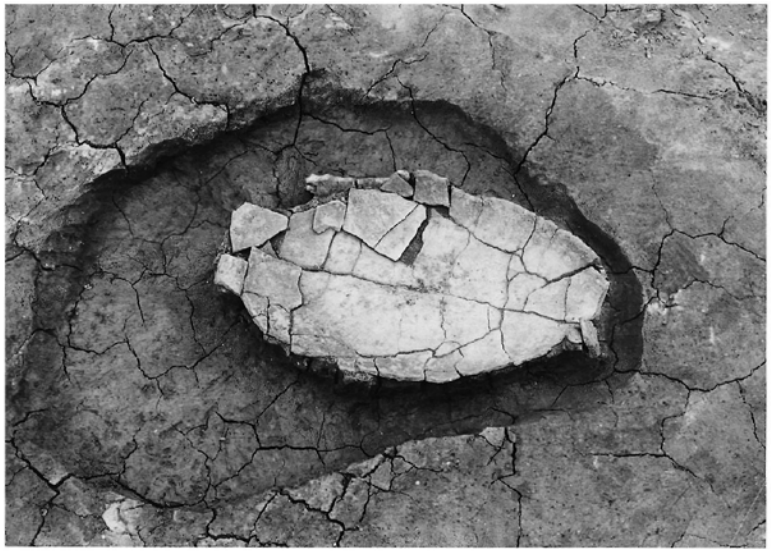
(2) 9号甕棺墓（西より）

(3) 10号甕棺墓（北より）



(1) 調査区北側甕棺墓群（南より）

(2) 11号甕棺墓（東より）



(3) 12号甕棺墓（北より）

(1) 13号甕棺墓（北より）

(2) 14号甕棺墓（東より）

(3) 15号甕棺墓（西より）

(1) 16号甕棺墓（西より）

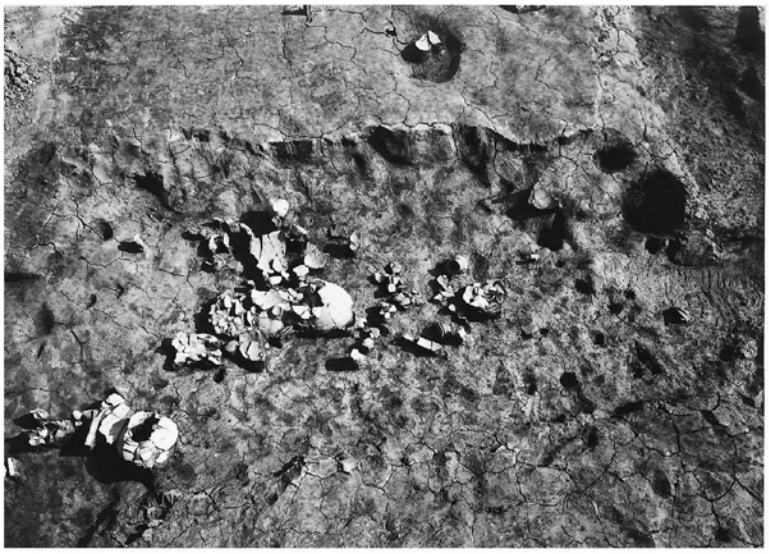
(2) 17号甕棺墓（西より）

(3) 18号甕棺墓（東より）

(1) 1号土壙（東より）

(2) 1号土壙遺物出土状況（南より）

(3) 1号土壙（東より）



(1) 2号土壙（北より）

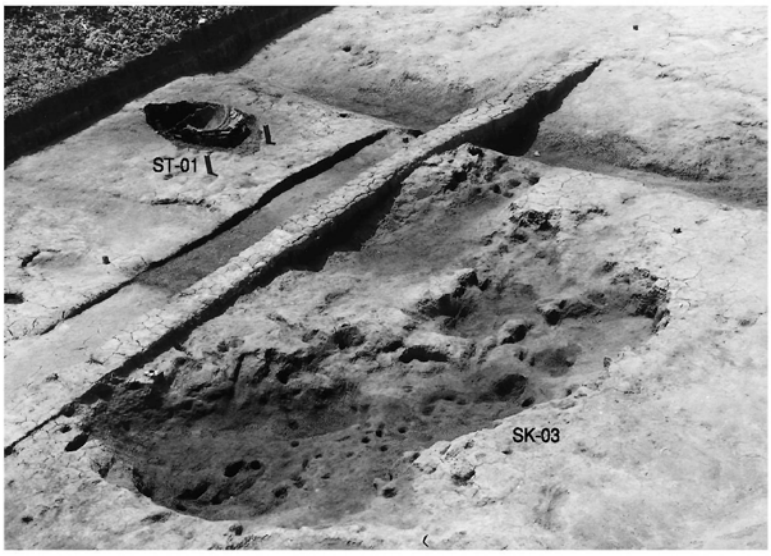
(2) 2号土壙遺物出土状況（北より）

(3) 2号土壙遺物出土状況（西より）

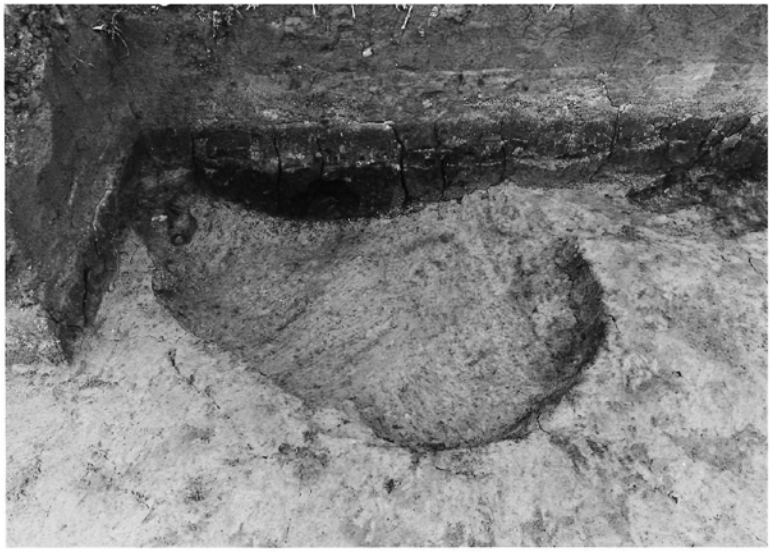
(1) 3号土壙（北より）

(2) 3号土壙遺物出土状況（北より）

(3) 3号土壙遺物出土状況（北より）

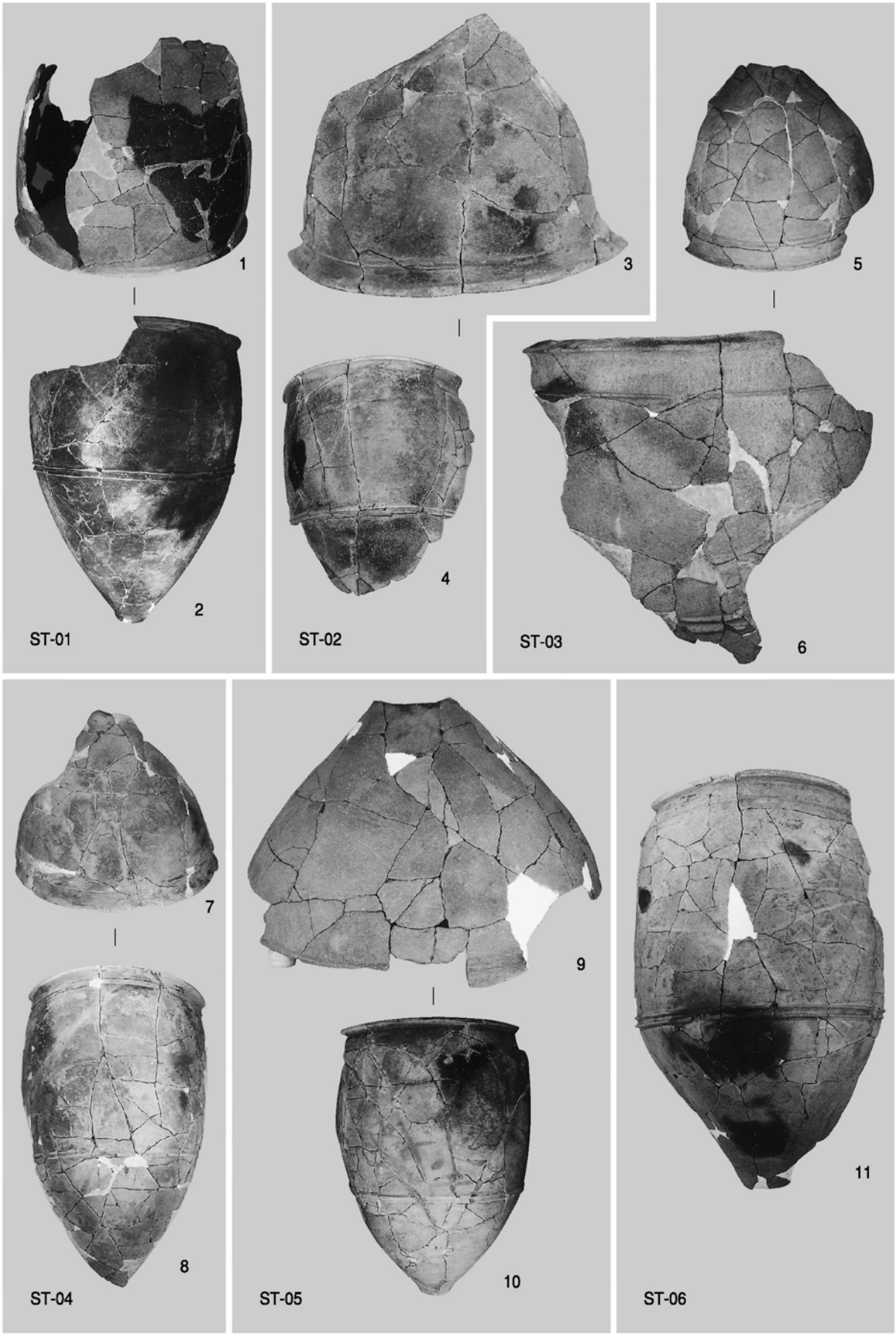


（1）3号土壙（北より）

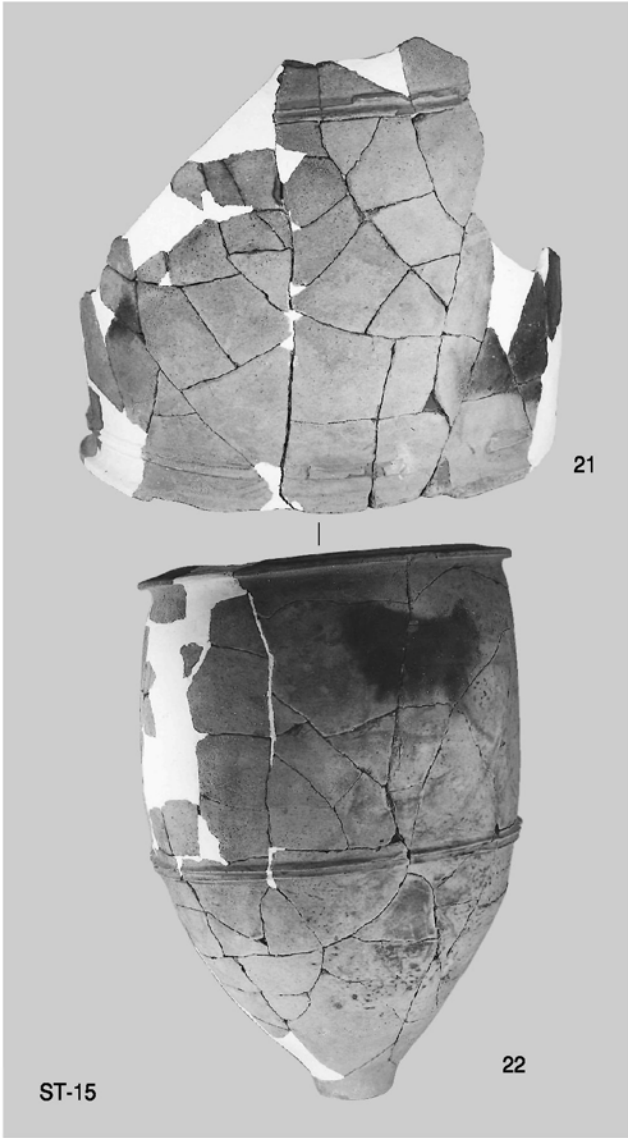


（2）4号土壙（東より）

（3）5号土壙（南より）



出土甕棺1（縮尺不同）



出土甕棺2（縮尺不同）

23

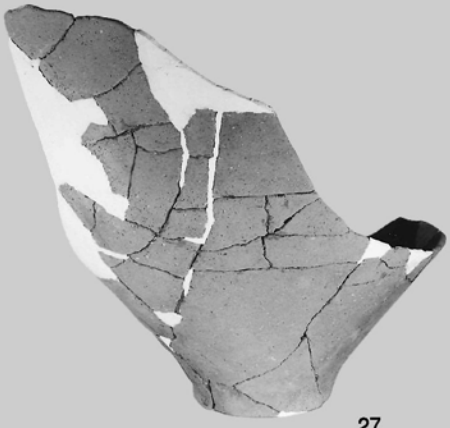
24

ST-16

25

26

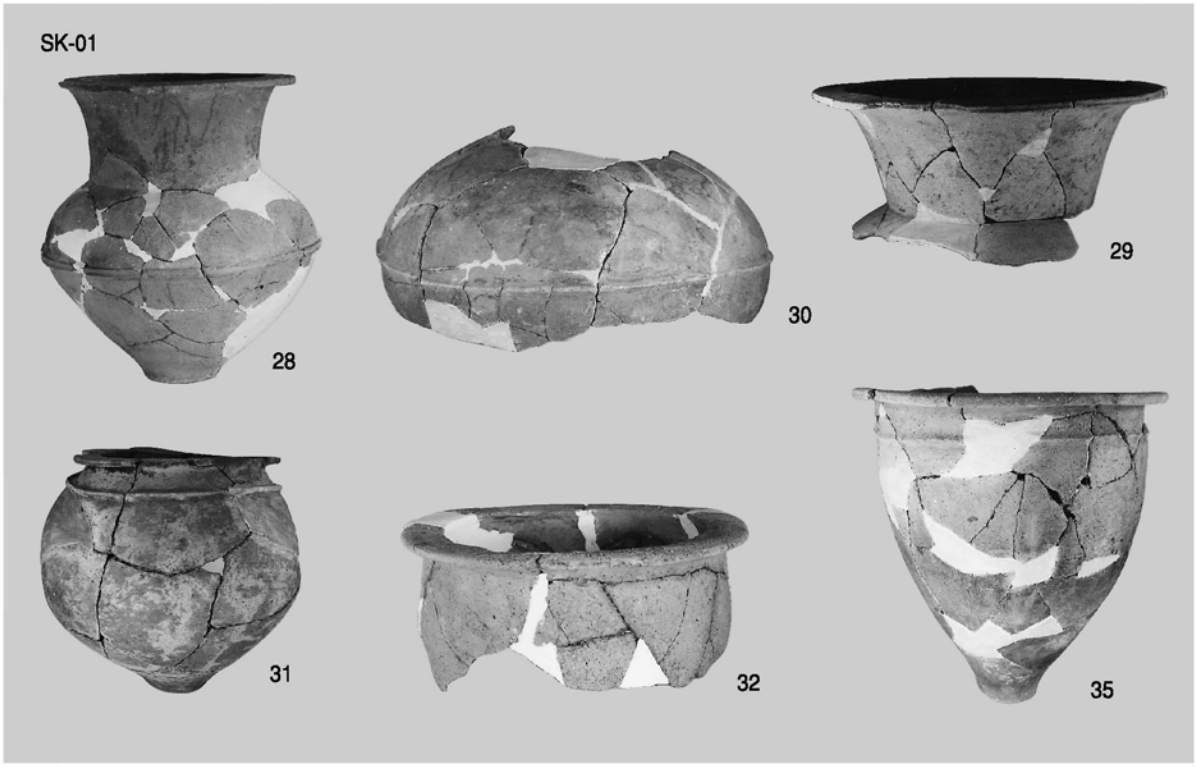
ST-17

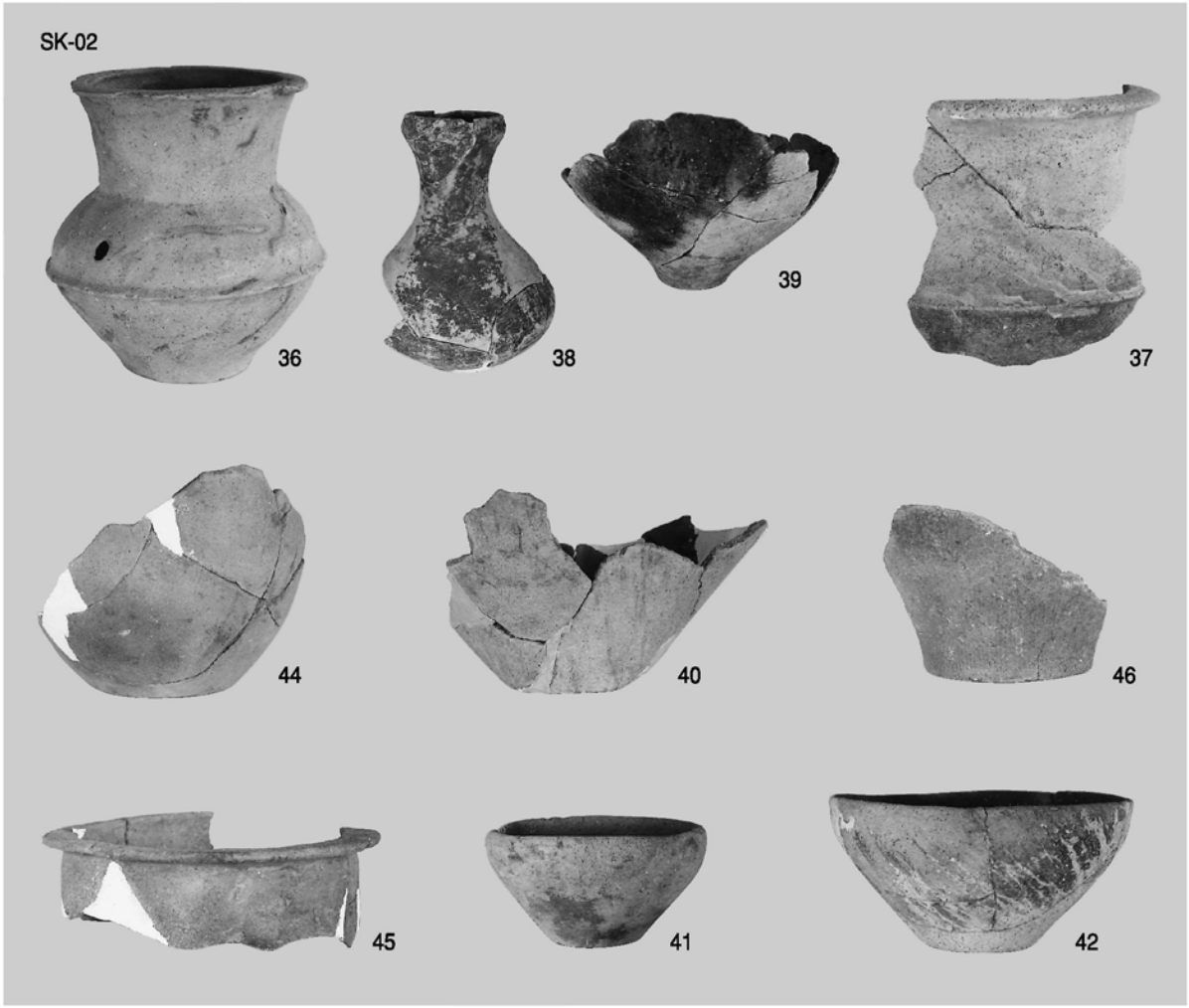


27

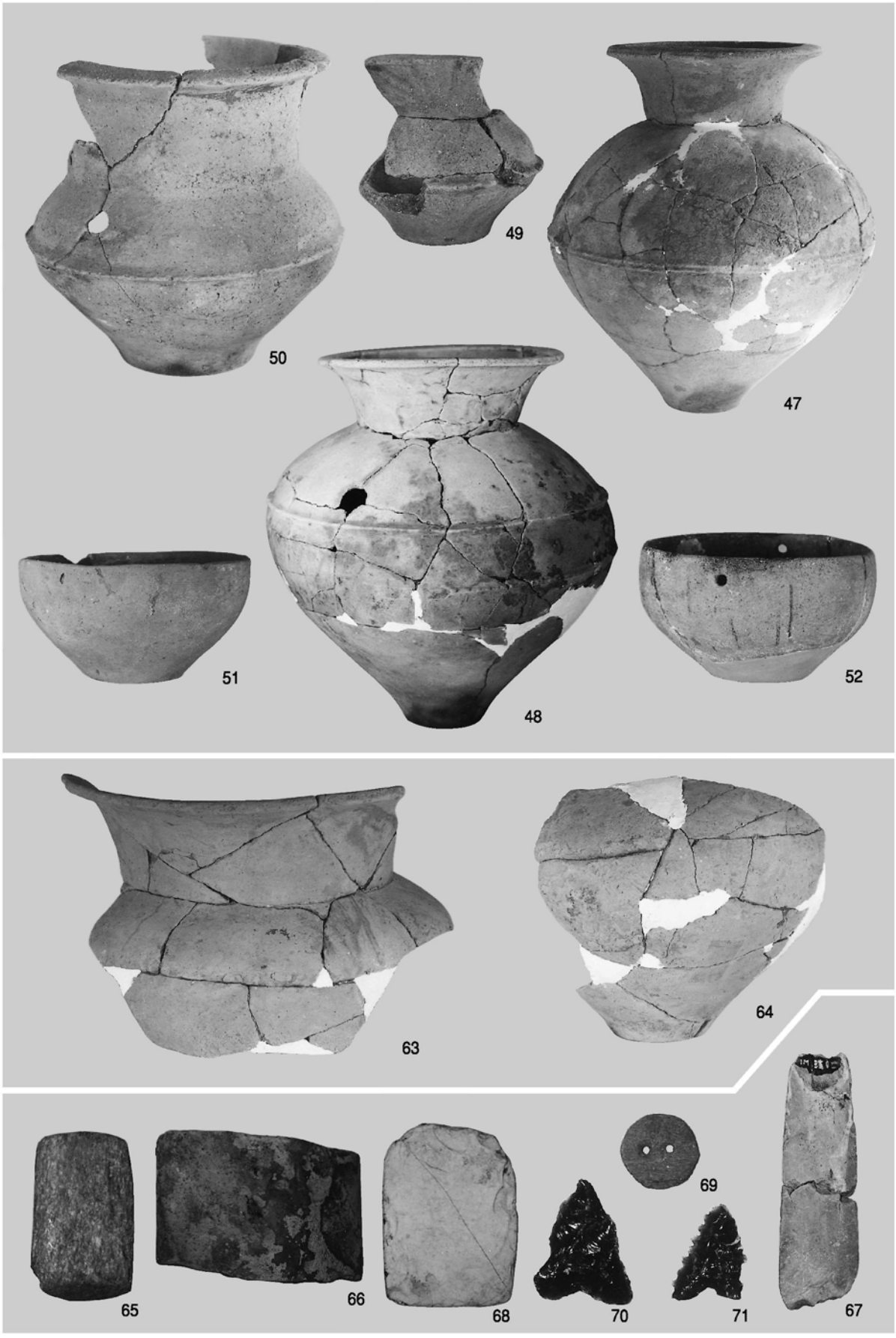
ST-18

出土甕棺3（縮尺不同）





出土遺物1（縮尺不同）



出土遺物2（縮尺不同）

報告書抄録

ふりがな	はらひがしいせき
書名	原東遺跡２
副書名	原東遺跡第１次調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第９５３集
編著者名	小林義彦
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2007年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
原東遺跡（はらひがしいせき） 第１次	福岡市早良区（ふくおかしさわらく） 飯倉４丁目	40130	0313	33° 33′ 48″	130° 21′ 2″	19790401 ～ 19790531	823㎡	共同住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原東遺跡 第１次	甕棺墓	弥生	甕棺墓　土壙　溝遺構	土器　石器 石製品	

原東遺跡２

―原東遺跡第１次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書953集

2007年（平成19年）3月30日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷　慶和印刷株式会社
福岡市博多区東那珂1-15-1